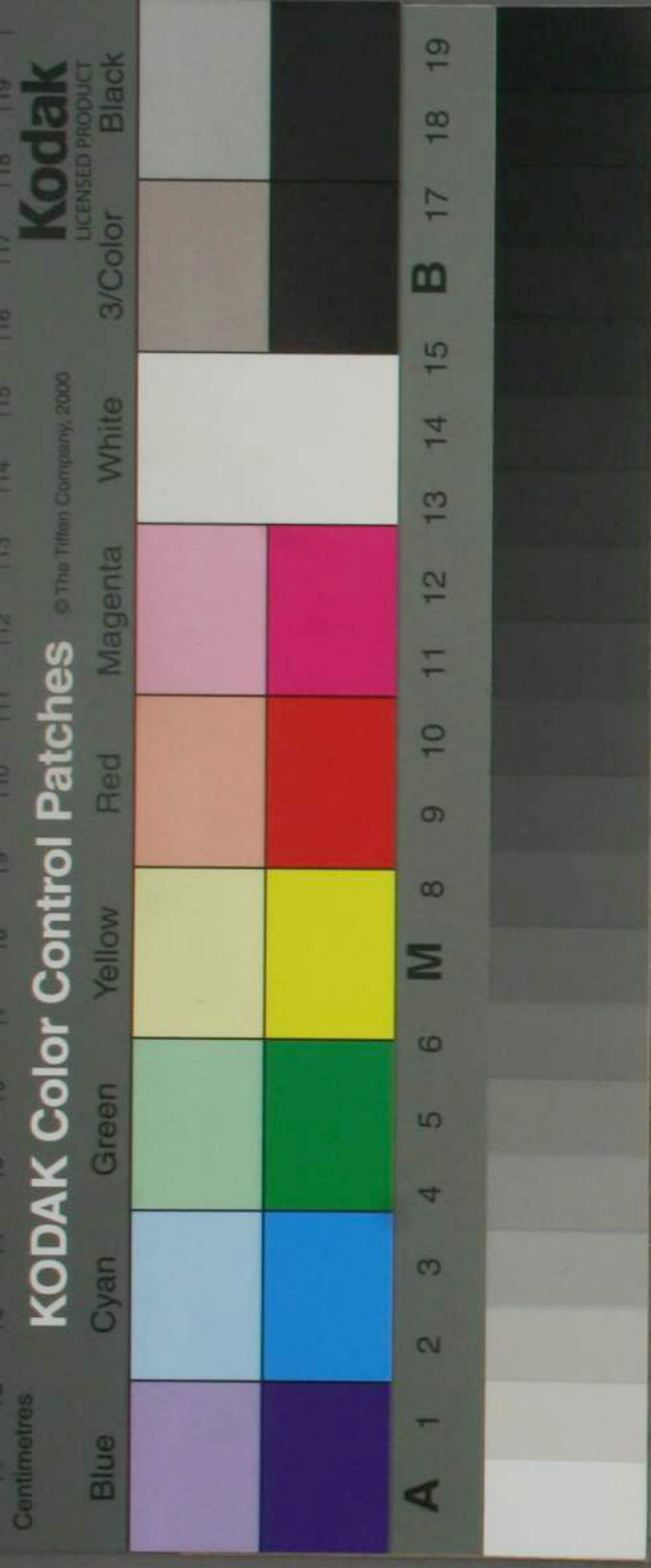
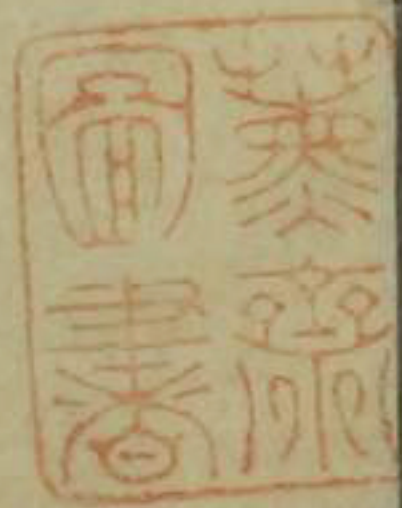




門凡4
3647
3

成田叅詣記卷三目次



船橋駅
意富比神社 日蓮上人木剣 同神息剣
三山村 同印 古文書
三山明神社 千葉七郷考
井野村
加賀清水 宗徳寺 所蔵古剣 原胤安墓
白井故城址 太田圖書墓 八幡社
白井庄 老楠
浄行寺 原氏所寄日蓮像 經文机識
神明社 菅田駅
浄勝寺
長福寺
下野牧
圓應寺 古鏡 白井家系

昭和廿三年
三月廿七

成田参詣記卷三

意富比神社

五日市場村小あり

五日市場村と九日市土人神明と称し社領五十

石

天正十九年

延喜式

神名帳小葛飾郡二座

意富比神社

此神の事なる

社

社の傳小天照皇太神豊受皇太神宮八幡宮春日明神と合殿小祀と云

神鳳抄

伊勢大神宮造替遷宮

二所大神宮

神領諸國神戶御厨神田名

田等

合下總國相馬郡御厨

内官上分布五十段口入百段雜用布百段外官

夏見御厨

一名船橋二百丁

速山形御厨

葛西猿儀御厨

萱田神保御厨

合五所とあり

伊勢大神宮

神領

伊勢大神宮と号せし社祀小其後夏見村の地あり

東西と二ッあり

古伊勢の神領

神明と号せし社祀小其後夏見村の地あり

神明と号せし社祀小其後夏見村の地あり

地小移せり

又所藏文書

天照太神と祀を祀必意富比社と云

天照太神と祀を祀必意富比社と云

異

古意富比神社

合せ祀り此社の社領なるを絶

た社と神厨事小付神明方の社領のとあれは神明と心得なり
或書小伊勢と朝日官と一奉官と夕日官と稱はと云ふ是ハ見行本
三代實錄延喜式ホに意富比字にイフと傍訓あり附會せしむべし
大斗乃辨神あり意ハ
オの假字なりと澄す
○富斗能地神

○三代實錄小貞觀五年五月廿六日戊子授下總國從五位下意富比
神正五位下此前小貞五位下を授けし十三年四月三日己卯授下總國正
五位下意富比神正五位上十六年三月十四日癸酉授下總國意富
比神從四位下と見ゆ

○黑河春村云帝王編年記小仁壽元年正月官符曰五畿七道諸國大
小神祇有位更增一階文德實貞觀十六年小從四
位下又大倭社注進狀小新國史曰寬平九年冬十二月壬寅朔甲辰奉
授五畿七道諸神三百四十社各位一階録畧同時從四位上と次第に昇
階し給ひなり其後なり天曆六年永保元年或永治治承四年元曆

元年建治元年等も天下諸神増位のと見ゆれ今もハ後二位なりハ
一々と云

○駿河國安倍郡上田村わごしと云ふ此村に大井神社あり大井川通り此村
と始なり志太郡益津郡此村に大井神社と祭なり大井川の名も
此社よりなり祭神姫大神罔象女命埴安姫命駿河新
材小大井神社祠官大楠祭神詳ふ社傳小ハ此も罔象女命なり
此社もハ田中城中ありて大井神社志太郡島田驛安倍郡井川村もあり其
云云外所も小祭なり延喜式又風土記ハ見ゆ神階帳ハ志太郡大井

三島河子神社何社の郷神なりとなりハハ詳なり
○神領船橋六郷と稱せハ地ハ高根村米崎村七熊村下飯山間村金杉村夏
見村都て六村なり
後猶後小見ゆハ按ハ中古顯社ハ神領大社ハ十二郷小社ハ六郷と見ゆ本
國香取ハ神領十二郷神崎社ハ郷餘國もさる例なりやハ
天正寺間府ハ由緒あり寺社ハ神領の上先領ハ地頭ハ文書ハ
ハ此ハ郡郷統屬ハ多く和名抄ハ符合なりと今ハ郡村ハ目考ハ
ハ

と心得るに古くはもとより弁へする由緒ありて神印と所持するものには更心増進を
 こととす社に私伝ふに孰も特恩のやうに云々せしむる古文書なりと照し合てよく考へて必
 小因らるる規規も遠くを給ふて愛憎もせしむる神印は露をりもなかりし事
 なり古と尋ん人々心得て一所の私伝ふるは神印の物小偏なりと云ふと舎はし
 記載しんことなり

○正月十六日神事二月卯日五穀祭四月十七日初負脊の神夏初穂稲のう

つりてと新嘗 九月十九日角力神事是月の二十日八太祭事少て其式

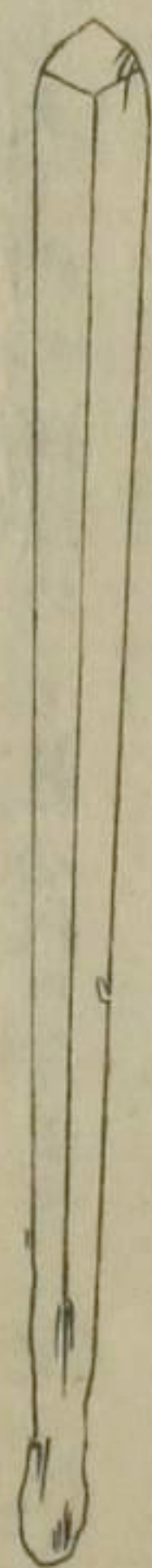
をなす古雅なり猶小祭数多しと云祠官富氏被官の社家四氏あり石上、慶

長十三年御造崇奉行伊奈備前守忠次此地小神殿と崇建せしめ

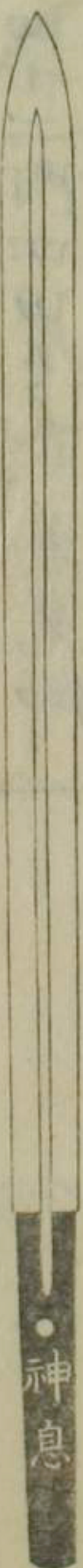
上総東金地方へ所放鷹時之事なり

移り ○以下黒河村より里の別録と摘抄を記し
 耶捨と加えしとあり原書と少く相違なり

日蓮上人奉納木劍 九寸九分



同 神息劍 一尺二寸七分



應永三十年鈔本劍工傳云神息元明天皇御宇和銅元年作八寸五分刀也
 宇佐宮住人之銅才工行平賀也他人之
 又云さの言も傳へていせいでんさうれはさ成つるはうけんねなり作也八寸
 五分百うさいそんりいすをやうと云ふ

同瓦製狛犬 同臺底



宮蓋裡書
 此師子象御日
 号御判高祖
 上人、相違無
 之者也
 中山 日利

皇代記下長曆三年己卯五月十九日有伊勢奉幣有震華宣命被奉金銀師子狛犬百鍊鈔卷十建久六年五月廿日貴布祢社立國司堀出金獅子一頭事於殿上被議定云或云隋書輿服志中辟邪殿庭ニ置タルコト見エ印鈕ニモ用ユル類スヘテカラ様ヨリノ習ナリ

五寸五分

一 下総國船橋御厨六ヶ郷
田敷之事

一 六郷本ハ二百町也

一 東船橋百六町六田大

一 西船橋九十三町三田小

け内ニ付之事

一 廿七町七田もん 漆郷

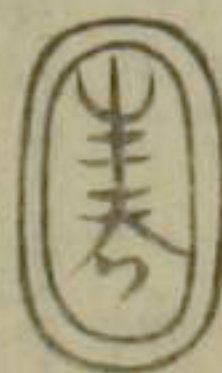
一 四十二町四田もん 友見郷

一 廿三町一田小 今曾本

集古十種印章部三
日蓮上人印 二



文永十一年三月十日與遠藤左衛門尉書所印



意富比神社ニモ元ハ別當アリシナルヘシ夏見ノ藥王寺ナトヤ都テ式社ニハ神宮寺ト云寺アリテ必ス藥師ヲ安置セリ猶考ベシ

一 田中

○船橋

色川三中日往昔刀祢川祢末ハ松戸のあたりより今の船橋へりて海ふ入けんと思ふ類聚三代格卷十六道橋事の條小應造浮橋布

○成田參詣記卷三

○四

施屋并置渡船事中下總國太日河四艘元二艘今とある太日も太日以上摘要

轉訛ならむとて此太日と右日に作りあへし太井お化此以上摘要

の夜に西船登りと思へし利根川に未船橋地へ落しと云はく思へし船橋は全宿中
小橋と云ふ橋をく此元船橋とありしをく太日河原より大河まで船をくは
渡りしと見ゆ三代格小渡船四艘とありしをく知れしあり此河
後太井と呼改り八島田宿に大堰川と同名とを避けしあり

式帳類從本小度會山田原造御厨改神序止云名五号御厨即号太神宮

司支云又等由氣宮儀式帳類從本小厨屋壹間長三丈廣一丈云吾妻鏡

卷六十七右文治二年三月十二日關東御知行國内乃貢未濟庄召下

家司等注文被下之可加催促給之由云今日到来注進三箇國庄

庄事下總信濃越後合下總國中船橋御厨院御領相馬御厨同前

黑河春村云院御領とあるは寫誤して大神宮御領なり院御領とあることあり
次文小信濃國麻績御厨とあるは神宮御領とあるは同國布施富郡保科とあるは御厨は虎付とあり
又藤原御厨は九條城興寺領とあるは倉科庄とあり錯乱たる事疑
な院御領とあるは某庄とありて是なり

船橋六郷八高根村米ヶ崎村七熊村下飯山間村金曾本村夏見村等

りと之れと文書小據て考ふに東八宮本高根米ヶ崎西湊夏見金曾此六郷

なり○六郷本二百町也神風抄右小船橋二百丁とあると見れば兼久

能頃より然りしなり其後六十町減少せしあり○百六町六田大

九十三町三田小大と二百四十歩をりしと二百二十歩をりし合せて三

百六十歩と一段とある百六町六段二百四十歩と九十三丁三段百二十歩とさて六田三田

お田八段の借字とて次文小反とあると天正十七年高城亂則の文

書小端とありけり但し田字と書る例は此餘にまた見ねしとすされど田

の字もタシとも傍へ吾妻鏡卷九左八小仁田四郎忠常とあり○

廿七町七田と云ふ以下三條合て西船橋九十三町三田小なり○湊郷船

橋は舊名なりといふなりさもあると云ふとされしと云ふ船橋は庄号

の如く六郷小係と号して地理いと廣う所をみればこれと東西

ふたつとて東船橋三郷西船橋三郷とせしものなり湊夏見

金曾木の三郷ハ西小属、宮本高根米、崎ハ東船橋小属、
 上小載、社家説ともあるを考へて考へて考へて思
 ひた、時ハ湊郷ハ今ハ海神村あたり、宮本より今ハ船
 橋、但、社傳ハ宮本ハ夏見村あり、
 郷船橋北小ありて、東西二村あり、神鳳抄ハ夏見、御厨一名船橋、
 夏見村北小、今ハ金杉村あり、是なり、
 八町三田三十、十三町一、
 十四、七町一、
 西方廿九町とあるに合さる、不審なり、
 十六町十五町、
 十一町とある、
 米崎今ハ米の崎村、
 應造浮橋布施屋并置渡船事

夏見村北小、今ハ金杉村あり、是なり、
 八町三田三十、十三町一、
 十四、七町一、
 西方廿九町とあるに合さる、不審なり、
 十六町十五町、
 十一町とある、
 米崎今ハ米の崎村、
 應造浮橋布施屋并置渡船事

○
 太政官符

一 浮橋二處

駿河國富士河 相模國鮎河

右二河流水甚速、渡船多、難往還、人馬損没不少、仍造件橋、

一加増渡船十六艘

尾張美濃兩國堺墨俣河四艘元二艘今二艘 尾張國草津渡三艘元一艘今一艘

大井河四艘元二艘今二艘 駿河國阿倍河三艘元一艘今一艘 遠江駿河兩國堺

河四艘元二艘今二艘 武藏國右瀬河三艘元一艘今一艘 武藏下總兩國等

堺住田河四艘元二艘今二艘

右河等崖岸廣遠、不得造橋、仍増件船、

一 布施屋二處

右造立美濃尾張兩國堺墨俣河左右邊

以前被從二位行大納言無皇太子傳藤原朝臣三守宣稱奉勅
如聞件等河東海東山兩道之要路也或渡船少數或橋梁不備因
茲貢調擔夫等來集河邊累日經旬不得渡達彼此相爭常事鬪亂
身命破害官物流失宜下知諸國預太安寺僧傳燈住位僧忠一依
件令修造講讀師國司相共檢校但渡船者以正稅買備之浮橋并
布施屋料以救急稻宛之一作之後講讀師國司以同色稻相續修
理不得令損失

承和二年六月廿九日

一尺一寸

鮎河愛甲ト同シ即チ馬入川ナリ今モ鮎ノ獻上アリ古ヘ
鮎河ト云シ名殘リナルベシ右瀬ノ右ハ古ノ誤リナラン
矢口ノ邊ニ古川村アリ此ヨリ取レルナルヘシ古瀬河即チ
今ノ六郷川ナリ

天照大神寄進狀

右下総國葛籬郡六郷之四至

▲夏見ニ山王ノ社アリ此社ニ向ニ左ノ方ニ神
明アリ是元地ナルヘシ社傳ノ宮本ト云
地ト云義ナルヘシ古文書ノ宮本ハ舟橋カ

東限覆官塚 南限海

西限洗河并沓懸北限石拔路

平滿胤私領國也依由緒有大神宮奉

渡任恒例天下恭平國土豐饒

可有御祈念仍子々孫々不可相遠寄

進狀必件

元年四月十六日

平滿胤

ヘシサテ宮本ト云村名ハ意富以神社
ヨリトレルナルベシ西海神村ニ湊ト云字
アリ往昔鎌倉時代ノ船津ナリト云
湊ト云シモ是ニトレルナルベシ今名ノ海神
ハ鎮守海神ヨリトレルナラン或云此村海
夫ニテ海人ト云シヲ人ト神ト同韻ナルヘ
海神トモカキシヤト云
七熊ハ米ヶ崎ノ分リシナルベシ熊ト米大
一ツモノナリ波佐間モ米ヶ崎ノ分郷ナリ
石拔路ハ金杉ト夏見トノ北ニアルコト必
セリ江戸名所図會ニアカサクミチト見ユ
據リ所アルコトニヤ

黒河春村云 饒此頃の作り字々々一社記小廢亡悲切同廢此曰志加

○覆官塚 山崎知雄曰覆官ハ意富比宮ハ借字々々一と云リ
の地と移る所小塚あり祠官富氏歴代其墓所
ナリト云土人金ヶ道と稱す蓋覆官塚ナラン
○洗河 山野村と西海神村と

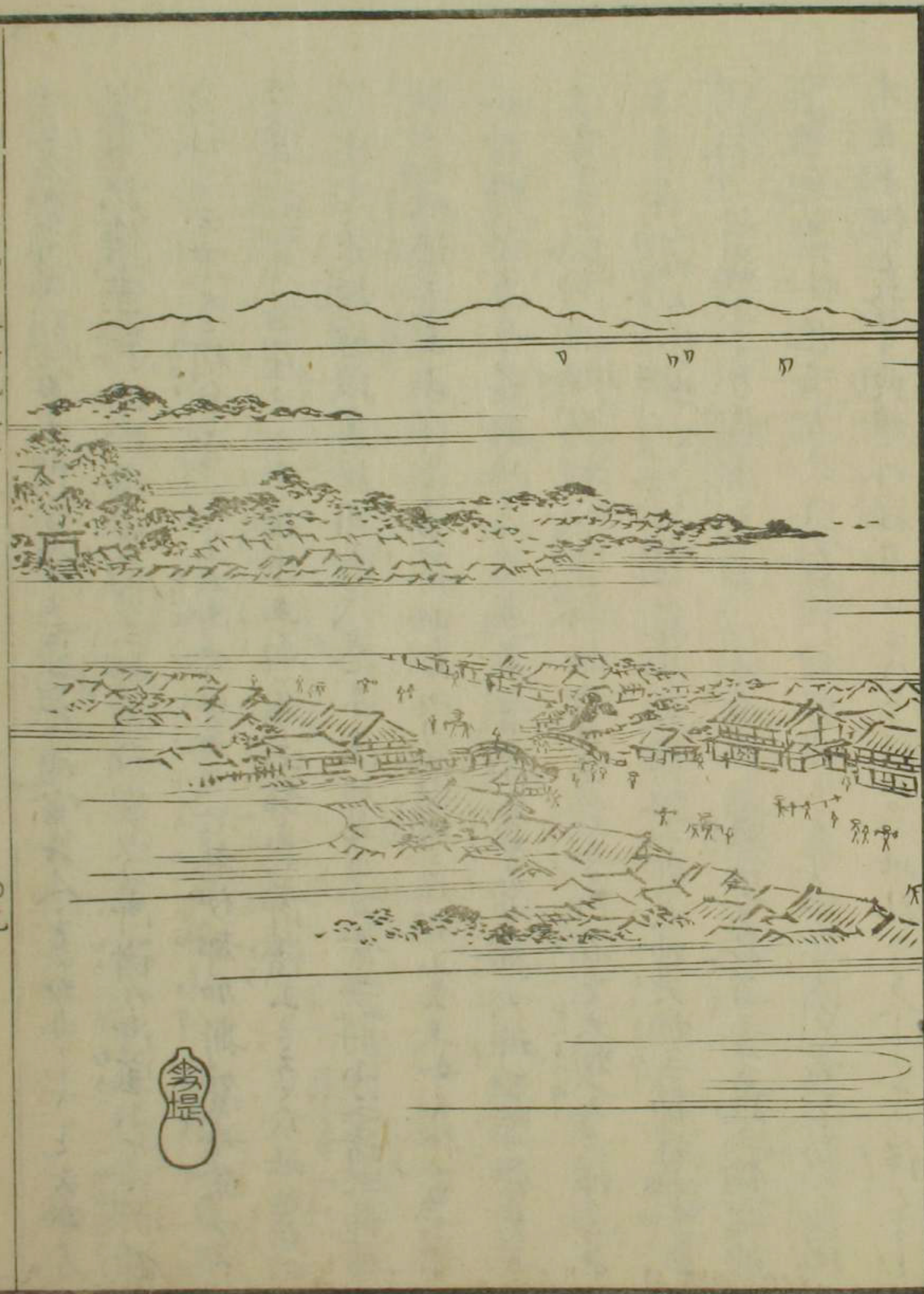
間小街道と横きりて流る中三尺ばかりの小川あり是と洗河とも亀井
 の太刀洗河とも稱ふといふなり ○沓懸 △初官某云山野のむら 沓懸の地名ありと ○石坂路 未考
 ○平満胤 按てふ満胤千葉の正統より千葉介常胤十代孫なるを
 名永三十三年六月八日卒 年六十四 常安寺と号し貞胤の孫氏流の男なりと云
 系図みねもむさなり ○私領國云船橋六郷ハ満胤の曾祖父胤宗 正和元年
 三月廿八日卒 其代よりハ御厨ふりと祖父貞胤 觀應二年二月廿日卒 父氏胤 貞治四年九月十二日卒
 の時小押領たりけむと此應永六年に至りてもとの如く返りしを承る
 たり依由緒有太神宮奉渡と云ふも右の故あり ○元巳四月
 十六日 平治元と云うに書る三字ハ後人の入墨なり 宝曆五年小書る 本社の化録に
 ハ承久元とあるといふも時代を古くせんためなり 一うゑたるもの
 りて實ハ應永六年なり是ハ満胤の時代より掲焉小なる所あり ○
 此花押ハ華押藩卷三十小も又平西如斯と並載たり

所蔵文書目録

應永廿年六月廿九日神田寄附狀断簡
 文龜四年二月廿七日舟橋云々
 永祿三年庚申六月十六日西舟橋九日市場云々
 子正月十六日 永祿七年 右於社中云々
 永祿九年三月三日右於下總國船橋郷内云々
 元龜二年辛未十一月廿六日右舟橋云々
 壬申閏正月十六日 右於船橋云々 元龜三年
 元龜四年癸酉九月廿日舟橋六郷之内云々
 戊子九月十九日 天正六年 喧嘩口論之事云々
 天正六年戊寅九月十九日自當年於船橋之郷云々
 八月十四日 如去年之神明之御町云々 天正七年八月廿日
 正月晦日 如未礼改年之云々
 天正十二年甲申二月十七日徳政之事御代言候云々
 天正十七年己丑極月十七日ハ王子免田四端云々
 天正十八年丁卯年卯月七日於下總國船橋之郷云々
 元和九年霜月吉日抑奉抽丹誠意趣者云々
 霜月六日昨晚者緩云々
 正保三年戊夷則念七日今度者何分云々
 五月朔日端午之御祝儀云々
 三月四日為桃節之祝儀云々

氏繼 △原氏
 胤縁 △原氏
 萬榮 △鹿朱印より北條
 豊前守 △原胤吉
 胤辰 △高城下野守
 正木 △大膳亮時茂
 胤辰
 胤辰
 阿弥道感 △北条上総介綱成
 胤則 △源次郎
 胤則
 龍朱印より里見義康
 田中吉官 △主殿頭より初空官後
 鍋島勝茂 △信濃守
 平後貞胤 △千葉氏
 秀就 △松平長門守
 光園

○茂侶神社ハ葛飾郡三輪山村ハある三輪山明神ナリ此社社領ニ
 ○成田泰諸記卷三
 ○ハ



船橋驛
乃圖

海上眺望

沖くふね

足柄小舟

つね家船

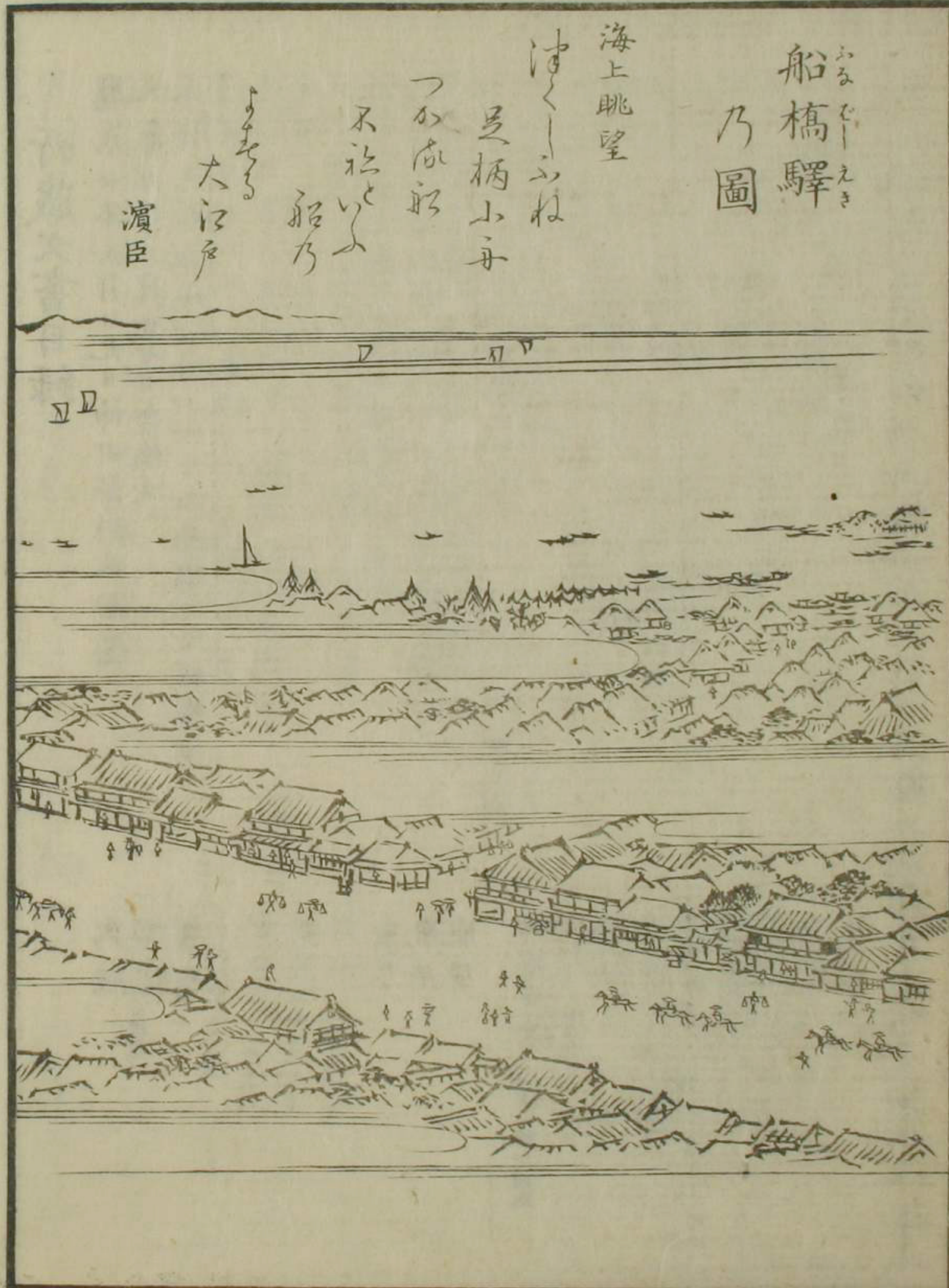
不社

船乃

ふね

大江戸

濱臣

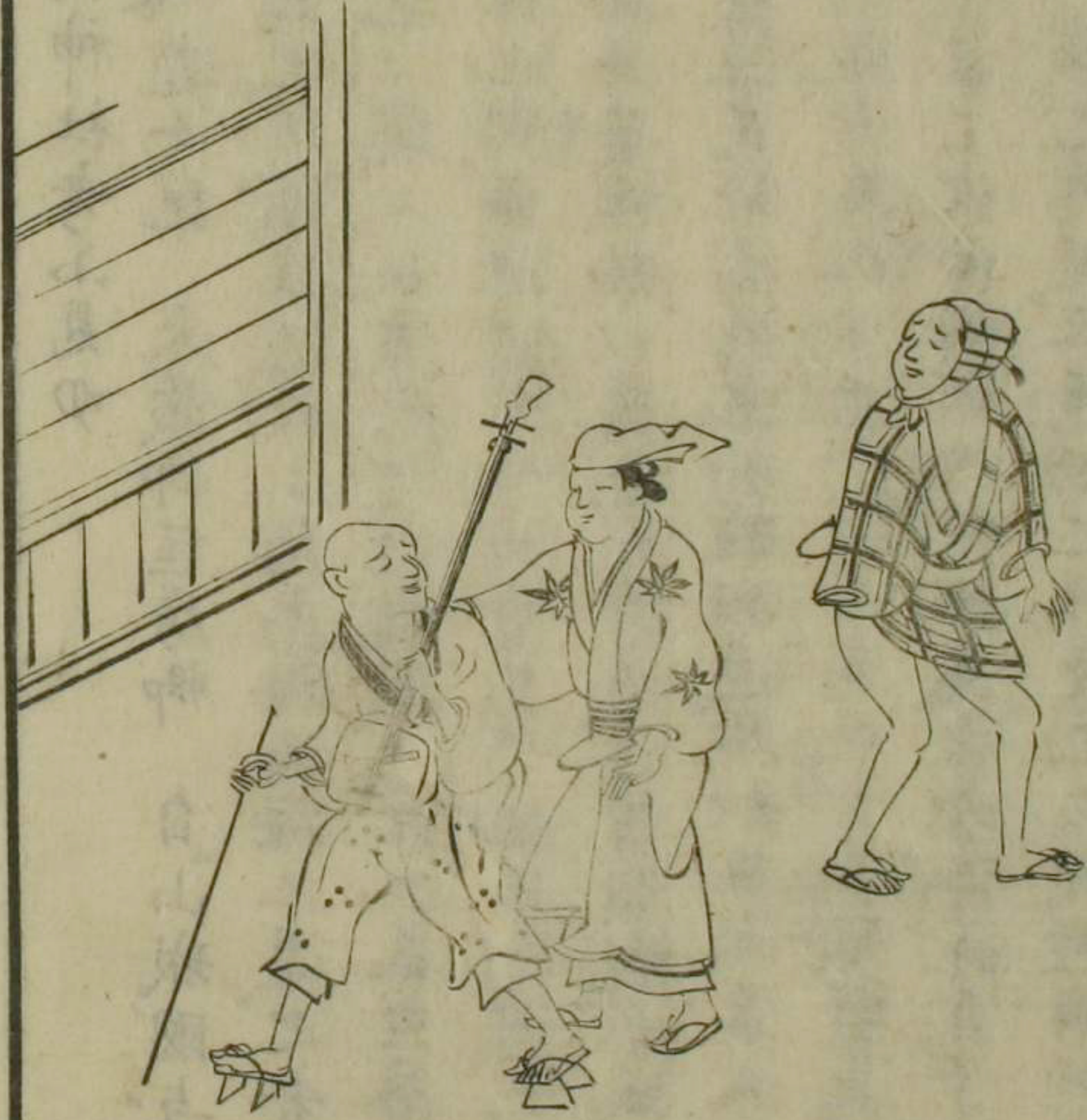


十五石ありて別當と神宮寺と云元は祠官人そありしと云あり
古事記傳十二二十小渚諸山ハ即三輪山のこあり渚諸ハ渚宮小て凡天神
社と云下卷朝倉宮天皇大渚哥に美母呂能伊都加斯賀母登云云
万葉三四十小吾屋戸尔渚諸乎立而さく三輪山と渚諸山と云るハ此と始小
て中老水垣宮段書紀同御代卷ふとに見え万葉二二十小三渚之神須
疑七味酒三宮山なくく免此山より渚諸とハ右小云る如く何處小ま
社神社のこなく此山し其名を負る取分て此大神と号崇免る
今京にて祭りと云ハ賀茂祭山
こつちたんとといつち日枝山なくく如此渚社小鎮坐渚名と大物主大神と申
白檮原宮段小美和之
大物主神と始て見えたり神名帳大和國城上郡大神大物主神社次相嘗新
嘗以上要此説小より推考るに茂侶ハ渚諸ハ發語ハ此省より此三輪明神
の事なり凡て古来の大社ハ神宮寺と云寺よりて別當と勤の敷地
こころ
木立も何となく典型の存するものなりハ必此社なりと其の詳あると

ハ下總武内神社考小見ゆ

○朝野群載卷三遊女記 大蔵卿匡房卿 自山城國与渡津浮巨川
西行一日謂之河陽往返於山陽南海西海三道之者莫不遵此路
江南北北邑々處々分流向河内國謂之江口盖典藥寮味原厨掃
部寮大庭庄也到攝津國有神崎蟹島等地比門連戸人家無絶倡
女成群掉扁舟著旅舶以薦枕席聲遏溪雲韻飄水風經廻之人莫
不忘家洲蘆浪花釣翁商客舳艫相連殆如無水盖天下第一之樂
地也江口則觀音為祖中君ナカノミコ小馬白女主殿蟹島則宮城為宗
如意香爐孔雀三枚神崎則河孤姬為長者孤蘇宮子力令小兒之
属皆是俱尸羅之再誕衣通姬之後身也上自卿相下及黎庶莫不
接林第施慈愛又為妻妾歿身被寵雖賢人君子不免此行南則住
吉西則廣田以之為祈徵嬖之處殊事百犬夫道祖神之一名也人

昔の遊女名を
観音と云ふ
朝野群載小見ゆ



成田参詣記

ふい莊嚴のうたは
こころをくぐりぬけ
さころ何大夫ふと
云ハ謡曲の師より
轉リててこハ
音曲妙なるを
稱せしむらん此
里の其ハ無衛と云
緯号ハ何より
なふや奇一こ
みとなりあるな
へ

七十一番職人歌合
三十番

あちふふや名はまきみのいたつらに
ひよりねあすまをあらけり
金間竹枝詞
千金不惜買多情只為娥眉一笑傾
但使愛才如愛色文人何有不平鳴

夢鷗漫叟

○成田参詣記卷三、

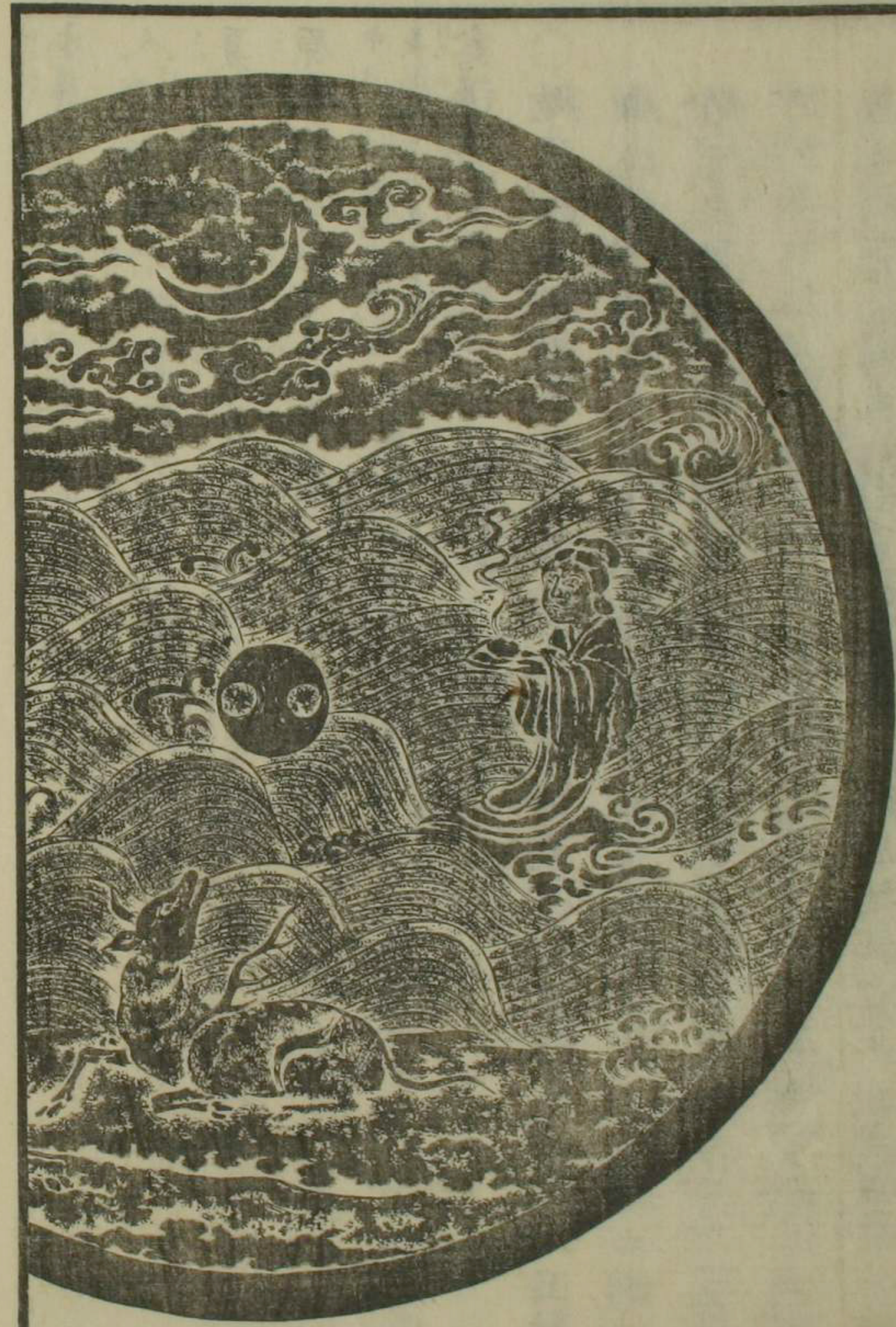
〇十一



別剎之數及百千態蕩人心亦古風而已長保年中東三條院參詣
住吉社天王寺此時禪定大相國被寵小觀音長元中上東門院又
有御行此時宇治大相國被賞中君延久年中後三條院同幸此寺
社狛犬犢等之類並舟而來人謂神仙近代之勝夏也相傳曰雲客
風人為賞遊女自京洛向河陽之時愛江口人刺史以下自西國入
江之輩愛神崎神崎人皆以始見為夏之故也所得之物謂之團手
及均分之時廉耻之心者忿厲之興大小諍論不異鬪亂或切麁絹
尺寸或分米斗升蓋亦有陳平分肉之法其豪家之侍女宿女下船
之者謂之端繕亦稱出遊得少分之贈為一日之資愛有髻倭組絹
之名舳取登指皆土九公之物習俗之法也雖見江翰林序今亦記
其餘而已或云百太夫云ハ男根ノ自ラ多ク持ヘタルカアルコトナル但シ百太夫ノミテハ通シカマルヘ道祖神云ミト云コトヲ注セシナラン又云傍書一條トアルヨリ上ハ江翰林序ナリ下ハ即チ匡房卿ノ記ナヘシト云ヘリ
西光山淨勝寺 船橋漁師町小あり寺領十石 天正十九年 淨土宗増上寺也
辛卯十月

本尊阿彌陀如來開基詳寺紋小菊桐三鱗を用ゆ 北條家由緒也 開山金蓮社頼譽周公上
人 永正三年中興專譽大朝上人 寛永元年三月 廿五日夏見山長福寺 東夏見村小あり 觀音堂領五石 天正十九年 禪宗曹洞派栗
夏見山長福寺 東夏見村小あり 觀音堂領五石 天正十九年 禪宗曹洞派栗
原本鄉寶成寺末なり 開山得蓮上人 田融天皇御世 中興夏見加賀守政芳永
中興人法号瑞興院殿 本尊正觀世音菩薩 由來見 鏡藏見 此寺每年二月十六日天堂
念佛躍念佛躍と云法會 念佛躍と云法會 念佛躍と云法會 念佛躍と云法會

○鐘識 前下總國葛飾郡千葉庄夏見鄉夏見山長福禪寺者方 田融
帝統御之時上人得蓮救世大師靈感為嚴慈草創之遠挑四明法
燈實為東關台宗之巨擘也嗣後時代寢變數有興廢永祿中夏見
加州刺史政芳法諱瑞興院殿長福通榮大居士慨嘆靈場之將湮
沒及就舊址締草殿宇且割膏腴之地附之招空山和尚董席革教
唱禪相繼順清通法兩首座住焉法首坐與大檀越相議特請能山



武陵縮寫

社藏古銅鏡 徑九寸

或云此鏡ハ持統天皇ノ時代ノモノト云據アルコトニヤ。社傳三千葉家ヨリ源右大將家蒲殿へ贈ル書ト共ニ當社ニ納ムト云

藝禪師為之開祖藉是為寶成支流云々 下文化紀元甲子十月吉

日幻住豪徳寮室堅光識

下野牧 二總馬牧の權輿ハ天正度

御開府より此ことなりと云々此を明制

と頒たれハ慶長十九年以來なり

享保中野付組合村ニ定り 寛政四年改正あり 上野中野下野

と小金と稱ハ内野高野柳澤小間子取香矢作油田と佐倉と稱ふ別小

印西牧あり都て十一牧あり牧子と稱ふ士凡四十餘名各地に散在し

その長と綿貫といひ小金驛小住セリ 先祖ハ千葉氏の 毎年春秋二度に

官命ありて二歳以上の駒を捕ふ 先祖ハ佐倉ハ秋之 清水侯臣ノ流常紀

たり後 そのこと地方に偉觀と云

○主税式上凡諸國牧馬不堪貢進者申官賣却混雜皮直毎年出舉

用其息利以充貢馬經國之間及牧馬秣料云云

兵部式諸國馬牛牧下總國 高津馬牧大結馬牧本島 馬牧長洲馬牧浮島牛牧

續紀文武天皇四年三月令諸國定牧地放牛馬 大寶四年三月

給鐵印于攝津伊勢等二十三國使印牧駒犢

厩牧令凡牧每牧置長一人帳一人每群牧子二人其牧馬牛皆以

百為群凡牧牝馬四歳遊牝五歳責課牝牛三歳遊牝四歳責課各

一百每年課駒犢各六十其馬三歳遊牝而生駒者仍別簿申凡牧

馬牛每乘駒二足犢三頭各賞牧子稻廿束其牧長帳各通計所管

群賞之凡牧馬牛死耗者每年率百頭論除十其疫死者与牧側私

畜相准死數同者聽以疫除凡在牧失官馬牛者並給百日訪覓限

滿不獲各准失處當時估價十分論七分徵牧子三分徵長帳如有

闕及身死唯徵見在人分其在厩失者主帥准牧長飼丁准牧子失

而後得追直還之其非理死損准本畜徵填凡在牧駒犢至二歳者

每年九月國司共牧長對以官字印印左髀上犢印右髀上並印訖

具録毛色齒歲為簿兩通一通留國為案一通附朝集使申大政官
凡牧地恒以正月以後從一面以次漸燒至草生使遍其鄉土異宜
及不須燒處不用此令凡須按印牧馬者先盡牧子不足國司量須
多少取隨近者充凡牧馬應堪兼用者皆付軍團於當團兵士内簡
家富堪養者充免其上番及雜駢使

○總常日記 此野ハ谷上總下總ふりて横四十里ふたふとそ

其野ふ十所よりにはやまうらにらん高さ一つふあまを此土道と
うて一團中を又三つふうこひまけうまを免の本戸をひらこ
牧使三人正使一人 副使二人綾蘭笠といふきて袴さうそくして馬ふまた
うりねほろを野駒とりのまはしはうひたてく本戸より入てわくの
圍ふのりいれそまふはよて野駒とそようひつういくたひくかく
追入て牧使ハ土道のうへなる假屋ふみて弱毛つけふやあらん

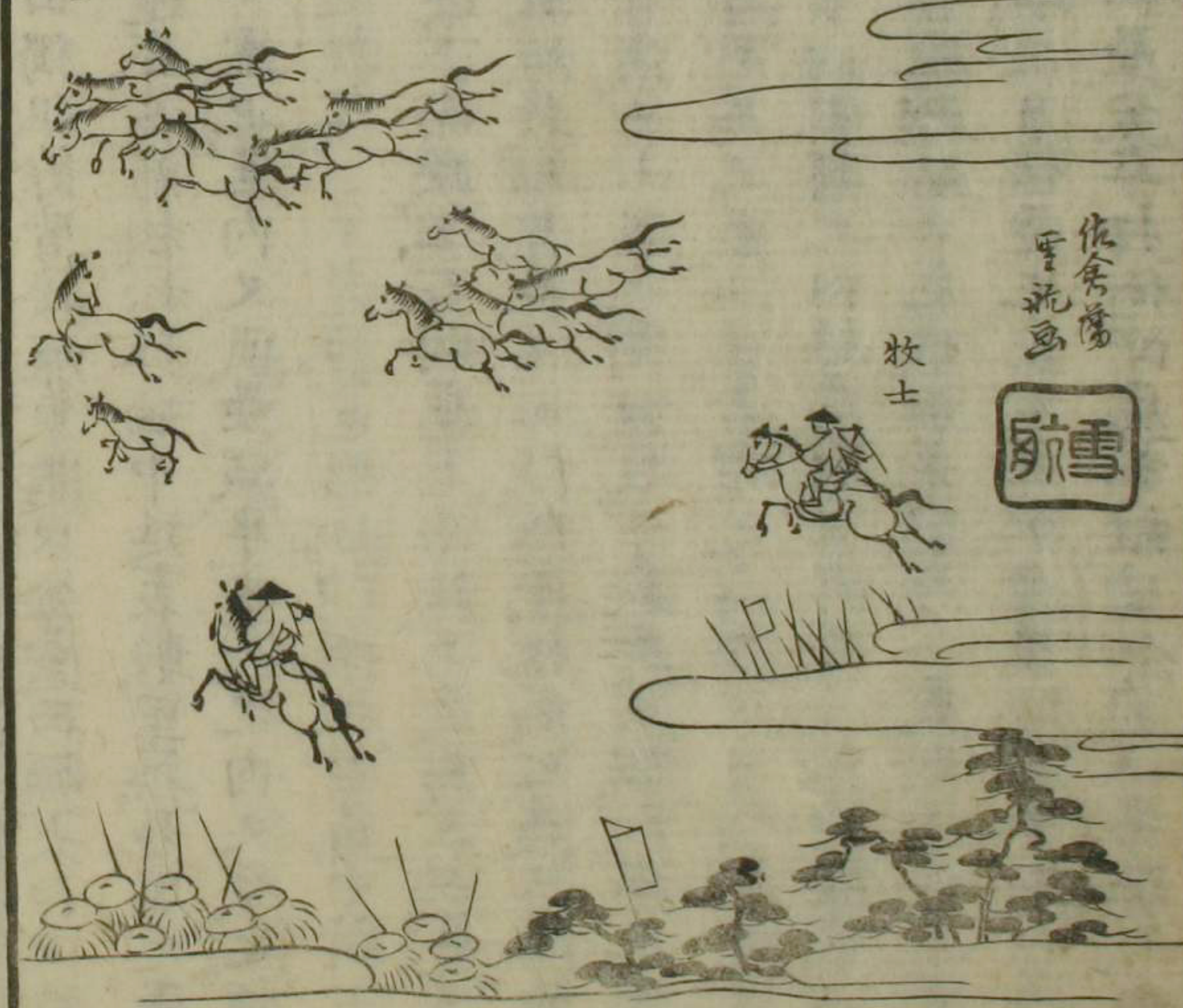
筆とりてさう一冊とりて五六十足の中のかこひ一入て列率と
もつなをめぐらしてなて駒と中ふとりこめ用ふあたふさふそ牧使
う社とさうとふるを待てうりこ社中に長たふたふもの一二
弱のふふとくへまを竹杖ふけもろておひまはしおひく社と一
人はたふらにうさつうておひたふあまう一人やうて口強とそを
引なつ四人をうて引くこひより十町けの西ふううう免の厩
免くまふらうはれくふりいふあうき駒ハうりいれ社ゆをそらに
敷ふ横入るそ有とううあみの中にあるほもこひつなうら
うて土道残らえて出んとそをまきの上にくりことそ多く
む社めてそをもて追わうすこて五六十足の中より砂さ
社たふも用ふあたふうう年とく又ハ来んとくハ用ふあ
たふきなほは焼たしてそてのこる不用の駒とそにつきおひ

となくやうなり焼印の國形所よりて印をうたうは社り五
六足はくろくはること數度ふてはてた其目にはめ退入する
駒に數六百餘にて用ふあたり引たて行く百七十ありな
べーく此大野十所をめぐりてとることな社を數ありあ
たふること思ひやりぬーいささくめはらーきふものさく
○秦嶺館文集菱川大觀始觀執駒記 余初來江都則聞南北總多曠野
而牧馬蕃庶夏月執駒奇觀也心竊馳焉旋及視佐倉學政増得詳
其說曰城東十里有酒井驛遵路北轉東折而行數里設十字門
謂之木戸踰則為内野一望可方十里又東為高野方二十里又南
且西為柳澤方三十里並處突出若懸疣然謂之入野并是而計
則不知其幾許里以上本藩所管置典牧二員牧師數十人隸焉曰
小間子曰取香曰矢作曰油田地形皆縱長並牧長綿貫司之總稱

之曰七牧就中油田獨阻餘皆接壤東遷東金臺西瀨大和田殆乎
二百里云牧之四邊率多雜樹松林田中延袤數里築壘周之處
中斷謂之鳥貫、虚也其内又匝壘減半半減之内又半之謂之
溜袋又極小之謂之穀茂、者籠也形如凹字折右角中斷下畫
於内副二一左則連下而缺上右則屬上而缺下是為左右籠各可
容千匹正面土階數級踐以升壘、上作假亭板隔之為三階前方
數十步是捕場也每歲六七月之間課役于數郡蓋調列卒也先期
二日令傍近村民驅野馬之匿山林者謂之山拂翌日列卒數千裹
糧宿圍四邊逐出于田中謂之内拂及期典牧駕長黎明輕裝与牧
師數十騎舉鞭縱橫馳騁驅各處成群者哀乎一處既而或左或右
距數十步並之而馳又自後逐之左右並馳者蓋防其旁逸也倏忽
之際自外壘驅入内壘分卒扞衛斷處相繼皆如前次第驅之先聚

下野牧野馬執の圖

佐倉風土記云野駒在駒南者自平
葉野以東至根古名北者酒井以
東至寺臺驛原繼各三四十里風
牧子所官籍其北壯消息之數皆
有屬禁歲之六月吏未執之其執之
處謂之込込凡七處曰内野曰高野
曰柳澤曰耳香曰小間古曰矢作曰
油田是也每込三四十歩四圍築防
傍開二門及時刻卒呼噪牧士數騎
馳逆之或百或數十以聚一所而納
諸込乃官吏監臨會牧士簡擇毛物
不可者驅出之可者留之一人竿頭
繫繩纏駒首又一人躍上駒脊急抱
其頸仆之執之其込而止矣



佐倉風土記
重光
牧士
雪跡

手三持レ竹ハ
三尺許ナリ
小幟ハ村々
名ヲ記ス



穿處へ
追ひ入る
の図



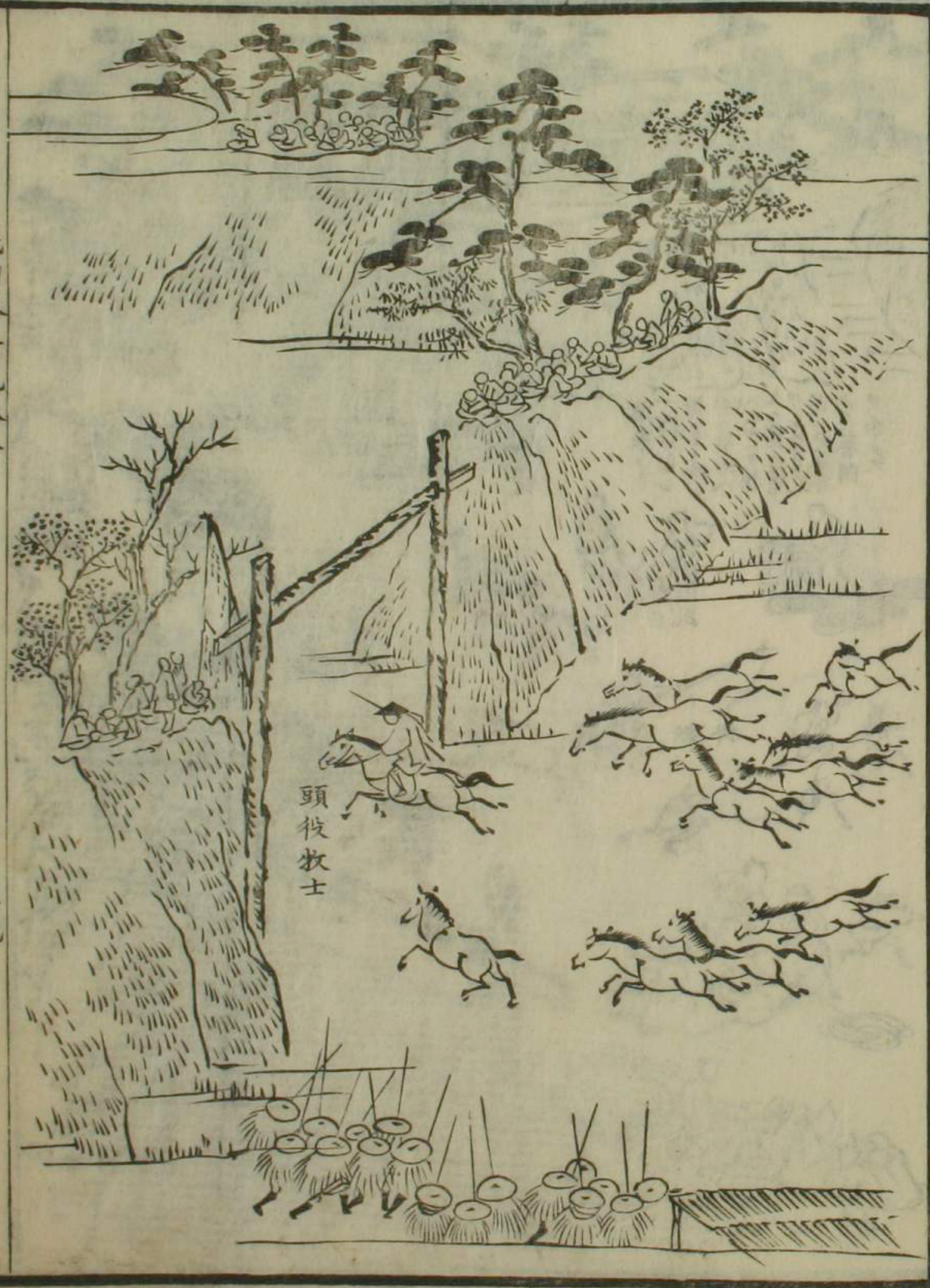
雪跡

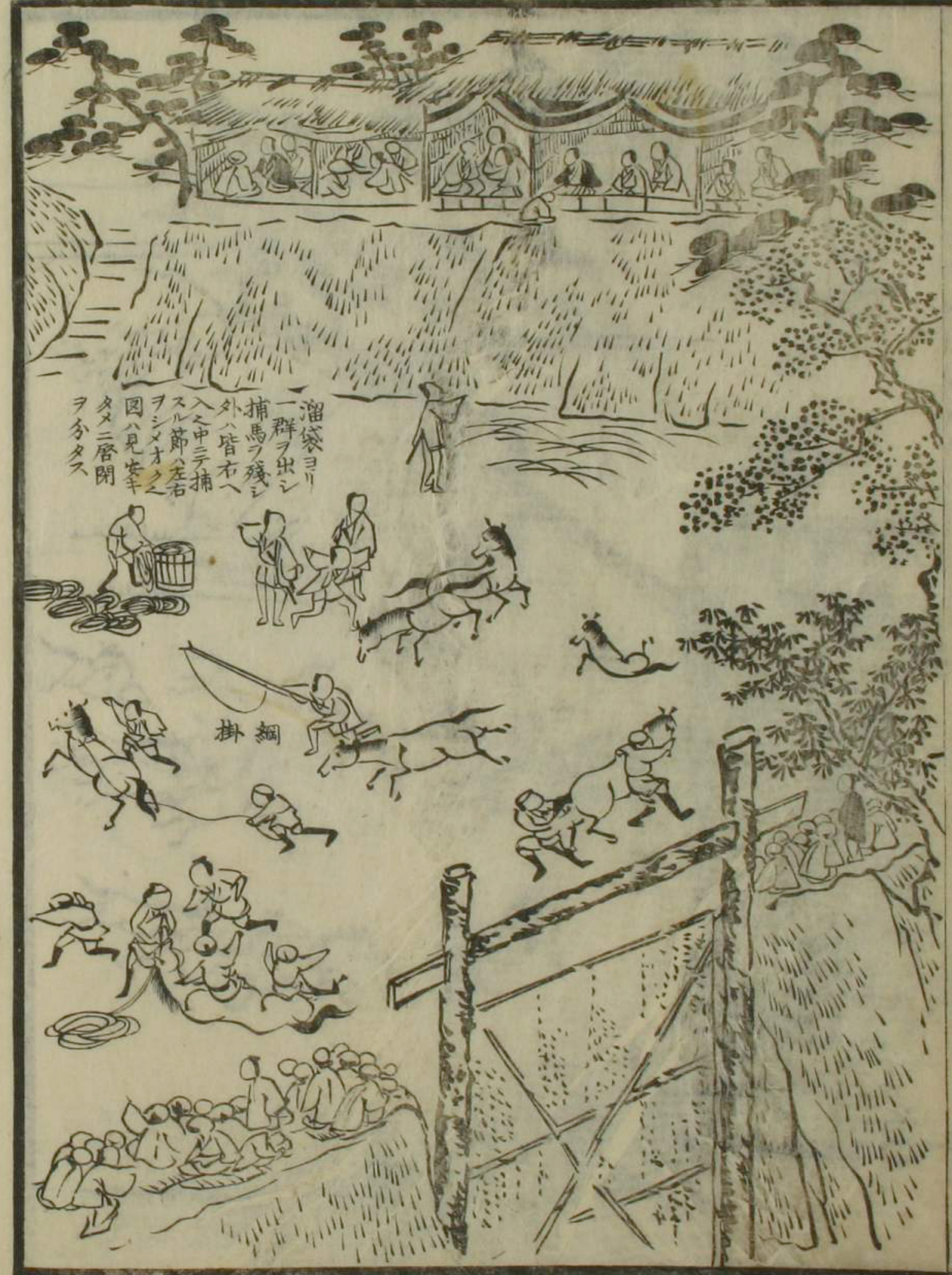
其二



馬ノ分免ヤ一群皆
其馬ヲ圍繞シ居ル
一日母子行歩ニ及ニテ
去ト云

牧士





野馬と人の
引立の図



一匹ヲ牽ク
人数凡十
人許

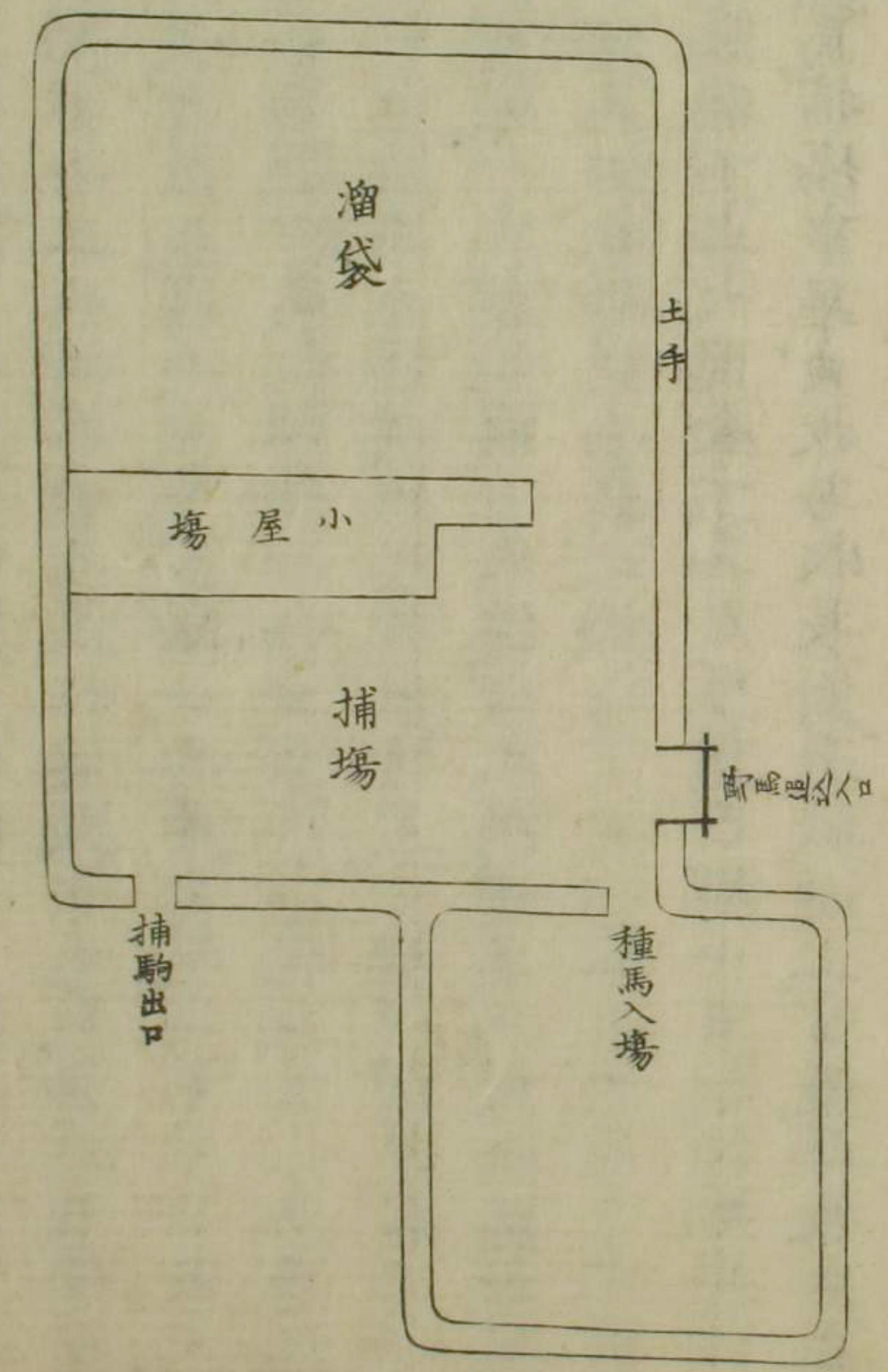
其五



下野牧込之圖

烙印牡ハ左北右種馬ニラ烙ス其印ハ牧コトニ異ナリ

近來進献ノ馬此地方ヨリ出ト云



于左籠又驅趣右籠此間典牧既下馬立階左官使至則整折迎之官使一揖歷階先升坐亭右間典牧繼升易服坐中間駕長及鑿師坐左間書手二人侍亭前左右牧師數十人或持竿頭繫索者或剪小竹杖之散立場中分卒塞場口又擇民間有膂力者數人以充捕夫謂之駒倒於是牧師兩三人橫杖入右籠驅五六馬出或北或牡奔走場中持竿者圍視認毛物乘勢飛索絆頭釋竿數卒拾索控之而不克捉一夫躍抱頭一夫僂倚之或攫尾振或衝脇劫數夫戮力相挑與馬倒牧師從而羈之俾役丁四人牽送之酒井强悍者在路猶騰驤不止大困牽丁其力可想已驛中有牧師班頭後園築小壘納馬捕場事畢典牧與牧長對選駿送上官廐每牧二匹次者賜之藩每牧九匹餘咸賣之於民年有增減又或有倒而不羈之點印而放者凡孳生駒馱例取二歲以上校印之官廐下吏二人

代燒鐵印握長柄以點驪上每牧異章其他咸開場口放出任其所之壯謂之駒牝謂之馱者獨充任載之用之義蓋方言也初方馬之出籠牧師一人向亭上高聲呼其色歲駒馱左右書手秉簿記之然後應執者執之應印者印之應放者放之觀者其初踞內壘上以望從外入後則先至籠傍左右攀躋壘上或俯籠或臨場其樂不可言也余晤斯言形竦席間神飛郊外者久之爾後每歲祇役佐倉率留五閱月以乙卯之秋與齋藤翁暨二三子約將往內野有故弗果越數日遂奔柙澤四更起蓐食而發各提燈照途從者一人擔絡尾之出城南經鑄木村而曲折度田徑生路不辨方位其行可二十里而東方稍白又趨數里而入野則宿霧四掩草露沮洳排草躡露步又數里而得一壘踰中斷處而左右望匹馬無所見二三子以謂群既入內壘也促步而進俄頃日出霧露餘青松如膏沐者方覩真景

爽快吐氣不覺又過一壘則數卒衛斷翁曰得矣群萃乎此際宜急倚前壘以逸待勞皆可其策快走進而登壘拭目延望四邊連天杳不知津涯垌中軟草氍毹潔泉玉浦林樹蒨葱點點乎廣野重疊繚繞似常山蛇勢使人有汧隴間想乃眷南方之原若雲之屯若錦之陣與初晰相映晶々炳々蔚々燦々余顧翁曰美哉溶々爲非是河精之颺采則或乾象之騰文也翁未及荅忽然呼色仄聞塵飛煙起衆皆裂眦則數十騎揮鞭矢驚電驅群馬喧嚷鴻驚兔走一瞬猶遲萬蹄重沓既超中斷渠爲若江河之決堤不遑指毛物辨種類既而群鬣又叢于北壘之下於是小甲指揮遠圍左右與後部分同心列卒蟻旋邑別殊號徽幟星羅騎者亦姑離鞍藉卉箕踞蓋又休馬足也此間再進而得先憑籠墨則日將隅壘上觀者嗔咽笠摩鞋累少焉復迥傳哄色地響草靡一騎鸛翔掠塲口而入左籠謂之端馬

群馬役之須更充盈籠中寸土靡餘則徒鼓鬣掉尾或張斷高嘶耳弗能翹足跳梁也余與二三子欲品評種類翁曰吁差毛斤形猶且不易矧於別種料才乎姑就陳篇而論之狼尾魚目則毛色也文臂花肩則形相也妍蹄繁鬣則種類也相混難辨若陰唇白顛之屬形或疑于毛色小領遠志之係種太惑乎才性且夫在垌之頃其可指而命者不過驪黃騄駼數品耳今籠中之殊相異態安能究詰也余欲置對不得徒撫空懷而嗟爾於是典收斂容欽行官使至塲外降轎子徒步而入迎接之禮捕羈之法咸若前說而或有所睹過所聞者寔可謂昇平奇觀也頃刻籠馬絕減三分之一則既過午暫閉捕塲謂之中休亭上下簾而就哺啜同人亦傾榼倒榭或火飯或香瓜各適其所適爲間復開塲時埃風吹熱炎暉煌々衆皆雖搖蕙當之尚苦難堪而乃捕夫賈勇與悍畜挑爭白汗汗血競流染沙竟擒

景行天皇葛飾
野みて御狩
の圖

高橋氏云 景行天皇
冬十月 到于上総國安
房浮島宮 今時磐原
六獵命從駕仕奉矣
天皇行幸於葛飾野
令御獵矣 太后大坂
媛波借宮 御坐磐
原六獵命亦留侍云々

其 一



武後

○成田泰諸記卷三

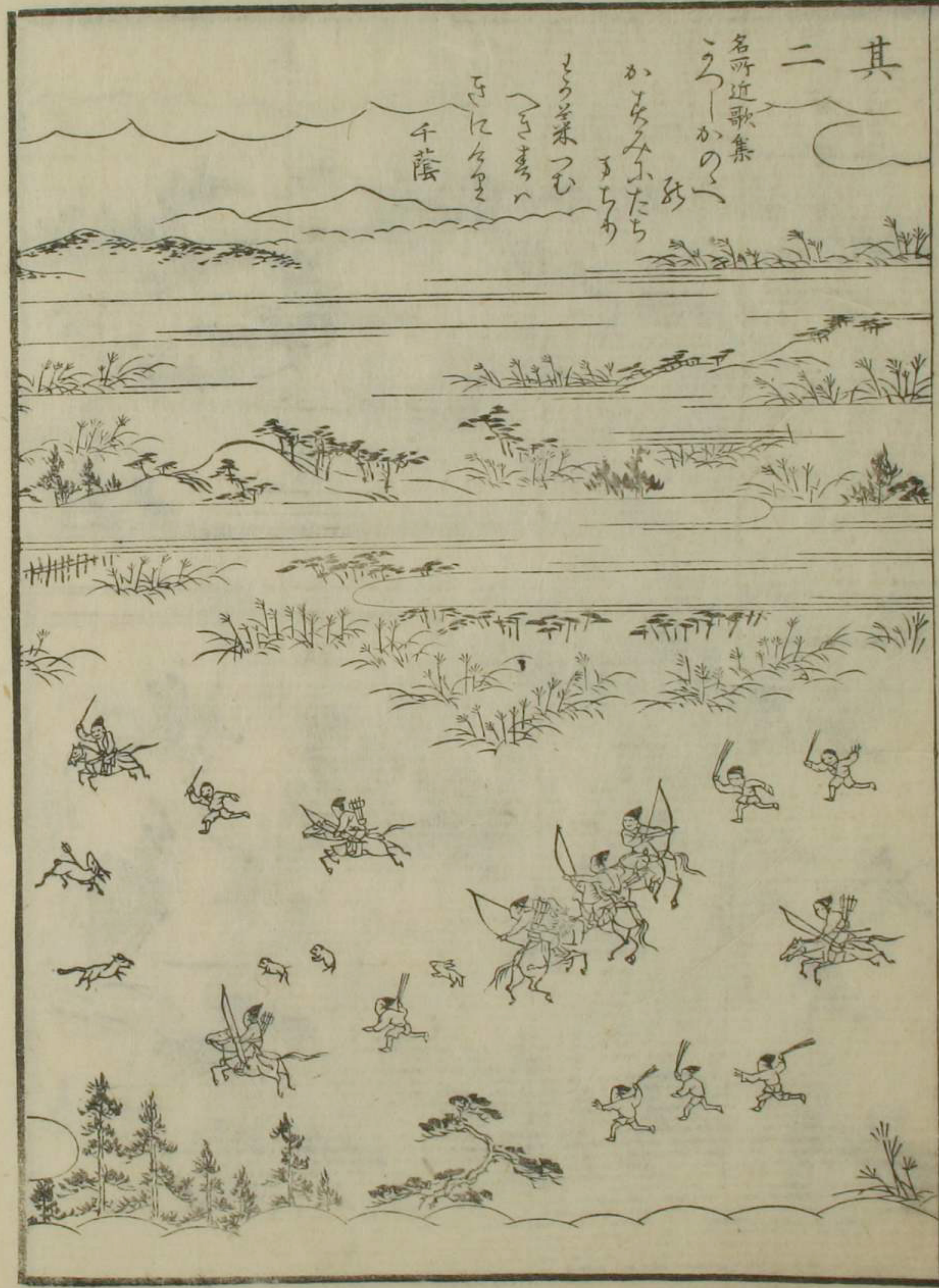
二十四



其二

名所近歌集

こゝろかのつ
かみふた
もろみつむ
ふにふふ
千蔭



千蔭山



之而罷未設羈金絡月之飾已觀竊轡詭銜之態稍近日昃而又減其半觀者齊張虛勢若不忍放目二三子亦皆壯齡曾無倦色余業已係老境畏歸途入夜與翁晉議而辭二三子割愛而去投側浮店啜茗幾碗解渴除煩憩息少時而再取舊路步且食烟行可十里易路北嚮度野傍林而走又十四五里而得村落距城尚遐偶認青帘隨量買醉而出一氣呵成入郭及還舍已黃昏揖翁相別浴訖便就寢夢魂猶彷徨于垆野間會如聽剝啄之聲驚醒而呼老奴伴出應門則二三子之告歸也時夜將半余卧不起榻上續殘夢此日寔八月初六明朝夙興記之翁名是芳二三子者服部俊秀竹内保定今井兼方從者乃余僕曰渡五○再觀執駒記上畧按舊志古昔東國有官牧信濃最大歲貢駒八十四匹甲斐次之歲六十四匹上野武藏又次之並五十匹擇四歲以上應堪用者八月上貢若不中貢者

則充驛馬例以八月望勞貢使于栗田口是曰駒迎所謂望月駒是玄惠庭訓舉信濃駒國風賦甲斐驪馬上野出駿載稗史併可以見其盛於古而衰於今矣又觀或云武藏牧長獨稱別當則所謂武藏野蓋亦垆牧也乃今不聞其有孳生焉而總中不惟前所舉七牧小金原又有三牧曰上野印西高田臺亦綿貫所司也金作又二牧以中下分稱房州又有峰岡並官使監之并前為十三牧於戲可謂蕃昌矣不知武藏之牧何時廢而總中之牧何時興焉方平氏之隆有秩父某永井等別當則牧馬猶存可知已總人或謂源公名馬生食者出自桺澤然據盛衰記則生食磨墨並奧人本吉某之所獻而南部之產也東野之語豈足信乎鑣倉以降記載余少槩見且野乘攸錄大抵詳於戰伐而略于制度矧室町之時幕府之令不行關東則事實之欠詳不獨牧馬一件矣按宋史咸平六年四月令河北轉

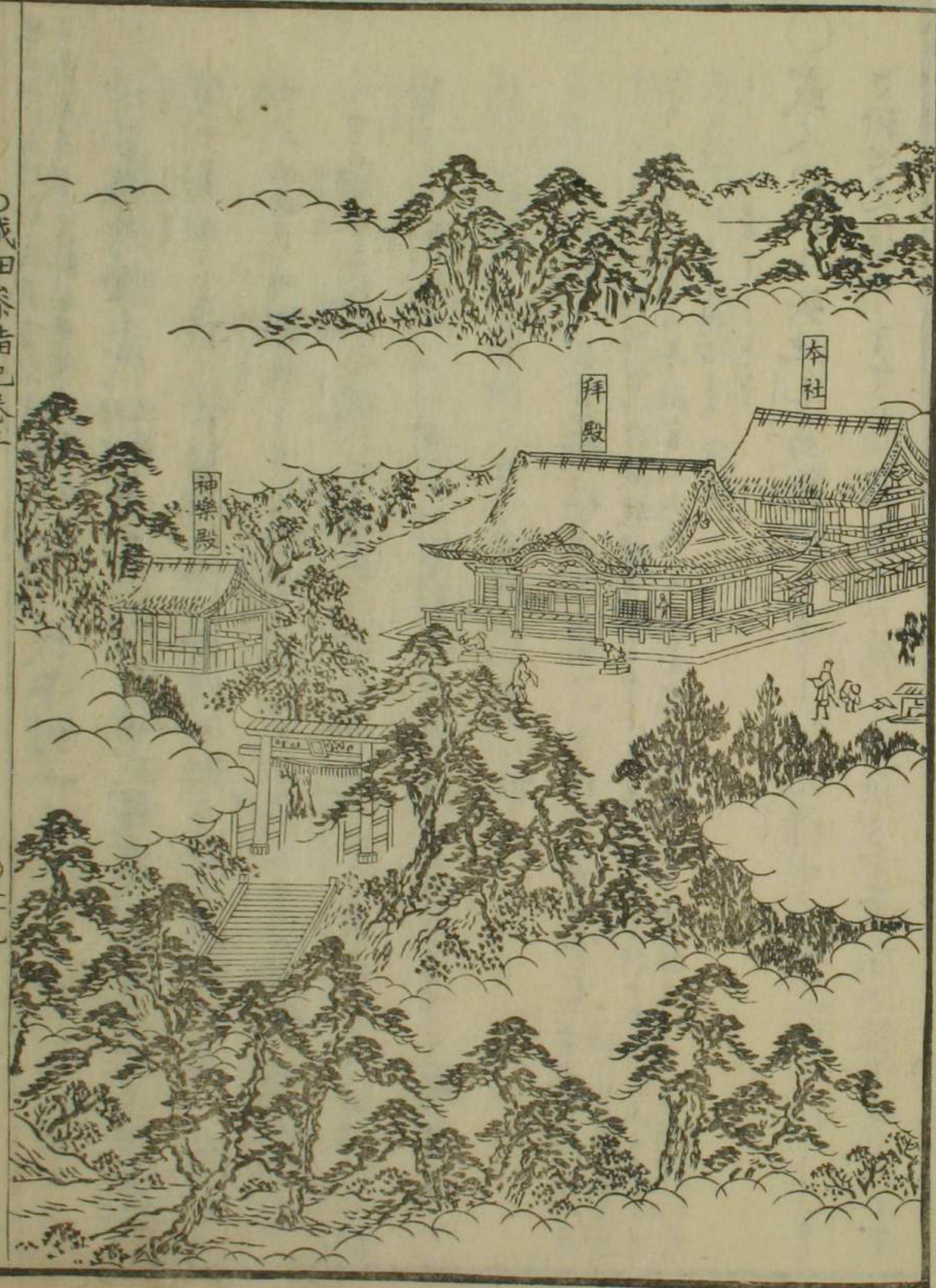
運副使攝群牧事其後遣判官循行諸監取孳生駒二歲以上點印之歲約八千餘匹凡馬群号十七左右字至退字毛物九十一種叱撥至驃駁嘉祐八年群牧司言孳生監每歲定牝馬二千牡馬四百歲約孳生駒四百以為定數是其為法与令所載大同小異周官曰春祭馬祖執駒此條令不見義解亦不及之也其候不可得而攷雖然舊志載八月貢駒事則執之當在六七月耳而今總中之役亦興於七月至九十月而畢皆異乎周典矣問之土人曰馬陽物也喜寒畏熱如冬春之際强悍難制至夏力衰故本以六月始至今遲一月者蓋自官使監臨以來之例也此言似有理焉又按擬駕用者屬牧師全生息者屬牧人見詩疏所謂牧人即令之牧子也亦今不聞有此職直任其自然牧師時巡野撿毛齒而已然孳生歲蕃息者蓋以水草之善故也則馬政所謂時出入游靡之節以宣其性情分

房棧牝牡之別以一其種者反不若任自然之靡勞歟左氏凡馬日中而出日中而入正義云春分百草始繁則牧於圉野秋分農功始藏水寒草枯則還概此周典之制也此等之法不見於今則蓋振古所不率循也但南部仙臺里駒者或有畧似焉邪宋王應麟曰古者牧養之馬有養之官有藏之於民官民通牧者周也牧於民而用於官者漢也牧於官而給於民者唐也國朝始則牧之在官後則蓄之民又其後則市之戎狄余竊以謂本朝古制槩唐典焉依南部之法則蓋類於漢矣總中又雖官牧而不置牧人任自然是其所以異乎歷代也寬政五年朝散大夫岩本君奉特命以親信領群牧使始來臨斯邦先是執駒之役牧師預錄毛色膚第呈之典牧擇其應捕者牝牡并執大夫建議革法不許取課馬爾後歲計孳生倍故云余就典牧質牧馬數曰今年本藩所管三牧捕馬賣民者百五十五

匹而留圉者千七百三十二匹綿貫所司四牧捕賣八十九匹留圉
千四百五十五匹其他六牧圉廣狹馬多寡皆未詳之若以所聞則
並狹於所管三牧而馬亦寡矣由是推之群牧總數不浮五六千匹
耳較之漢唐盛時曾不及五十分之一矣雖然唐之初起得突厥馬
二千匹又得隋馬三千於赤岸徙之隴右監牧之制始於此可見其
始涓々爲而乃用太僕少卿張萬歲領群牧自貞觀至麟德四十年
間馬息七十萬六千可見其終洋々爲故昔人有言汧渭之間未嘗
無牧而非子獨能蕃息於周汧隴之間未嘗無牧而張萬歲獨能蕃
息於唐此得久之效也今總房群牧之地比秦汧渺々則不足較魯
野區々則有餘大夫果有非子萬歲之才邪倍獲什陌之息吾有望
於他日爲若夫克史張說之頌余雖無似敢辭其責哉○牧馬論上
畧談地理者曰本邦雖僻在東斷長補短將二千五百里果爾與三

代所謂中夏之域足抗衡焉而乃今總中群牧之馬不過五六千匹
也其他奧羽等州之牧暨内外閑廐諸蕃之馬亦可推而知耳中畧
按宋史載本邦課丁曰八十八萬三千三百二十九蓋據僧齋然所
對而記也繇是推之當時口數雖多不過三百萬耳寶曆戶籍民口
二千六百六萬千八百三十而大朝暨諸藩士人陪隸並不在此數
見官中秘策據此則今時總數雖少猶及三千萬耳歷年僅八百而
增口殆乎十倍本邦氣運今而日開可知已

三山明神社 千葉郡三山村小あり 三山ハ和名抄の山 社領拾石 天正十九年辛
官分領 社に傳ハ素盞男命櫛稲田姫と祭祀りと云毎年八月十三日小湯立
能神樂なり此日祭日とトひ定め九月の内良日と撰むと云丑未の七箇年
目小取分て大祭事あり祠官と三山氏 外小社家四 別當と神官寺と云
名ありと云



三山明神
社の圖



まきの色れ
神の代より
あけねり
土り
まけ
まけ

蘆庵



医王山と号し新義真言宗吉橋村常福寺
尊茶師如來開基詳なり

氏子村千葉郡とて廿一箇村あり

帳考證土代伴信云寒川神社儀式帳寒川比女命信友云千葉郡
寒川新田と云所小古社あり今ハ神明と称されども式内寒川神社
村人の中ふて鑑取と云と撰定て神事小預らむ神体ハ所謂御幣
ふて祭日小新調へて舊物ハ海に沖持出て流るなり此神霊験
著と常にて云々寒川の奉村ハ神明宮ありと云々新田なるを
後小勸請一祭社と云々文政十五□記

○或傳小此社と茂呂神社なりと云いこのふと云々
また茂呂神社再造堂一字成就謹言とありと年号ハ詳ならずと云へといふ一書傳
なりとこれと天明元年祠官云山氏より吉田家へ差出せし書状ハ二宮明神の
茂呂神社と申往古より鎮座
と云々と書りしと云

○或人の説小此地元葛飭郡なりと云元禄中千葉郡小改り
されと元禄中より葛飭郡小属したれと千葉庄と稱して之を

千葉郡此地方より葛飭郡小あらは猶植生郡と香取郡植生莊と稱せ
しと同一ことなり一植生莊ハ舊より植生郡此地方より貞享三年より
舊小復して植生郡と建られ

○寒川村ハ天正以前より結城と稱せし地方此地方此處と今も結城と
と稱し結城山万蔵寺と云寺もあり新田ハ向寒川と云所あり此地
小結城明神と稱する社あり信友ハ寒川神社といふ此と云へなり
香取私記佐倉風土記ハ寒川神社ハ寒川村小ありと云へと傳
のちと記せしふて共小證とありと云へて寒川神社とて必寒川村小
ありと云定めたるハ郷村後世ハ種々に分合せしと云一概論
難し既小本州小松社ハ小松村小あらはて神崎村小ありと
地と稱せしなり寒川神社ハ此社なりと神名帳小相模國高座郡寒
川神社名神とあり後式帳小寒川比女命加波一宮記小相模一宮寒川比女命和名抄高座郡寒川と云

○神名帳考證土代

寒川新田

寒川新田

村人の中

祭日

著

後亦勸諸

祭社 文政十一五□記

○
或傳

また茂呂神社再造堂一字成就謹言とありと年号ハ詳ならん
なりされど天明元年祠官三山氏より吉田家へ差出せし書状
茂呂神社と申往古より鎮座
と云々と書ありと云々

○或人

此元

中々葛飭郡小属したと千葉庄と

千葉郡能地方より葛うづ

飭郡小あらは猶埴生

郡と香取郡

一と同一と

となくべー埴生、莊ハ舊より埴生郡所地

舊小復

て埴生郡と建らねた

○ 寒川

村ハ天正以前よりハ結城ゆうきよと稱なづセし地ちニ此地方このところあり

と稱し結

城山万蔵寺と云寺もあり
新田八幡も向寒川

小結城明

神と稱する社阿毛信友能寒川神社といふハ

香取私記

佐倉風土記永年寒川神社・寒川村小あま

の事を記し

せふて共小證とハなり。こゝにて空閑神祇

あふとふ

定めてゐる。その鄉村後世に種々に分合せしむる

籟
既

小松村のあらはに神崎村

地とて神ある
と稱せしな

寒川神社も此の如く一神名帳不相

川神社

神とあり
後式帳小字川比古命字川比女命加波一宮
社東鑑上一宮佐河大明神と云々あり和名

郷あり訓佐益加波今三浦郡まき海と
寒川浦と稱せりも因あることなり
尊奇稻田姫あて本地薬師如来あり此宮山三山も同じ名
祭神も共小素盞鳴尊奇稻田姫命を本地佛も亦薬師なり彼此合
考社寒川神社なるを推知るなり又此社号二宮と稱は二宮八神
名帳位次ふて香取と一宮と一寒川と二宮とせし号にや
此社ハ茂呂あて二宮なりと云ふと延喜式位次ハ
茂呂神社ハ茂呂ありて意富神社ハ後なりと云
千葉妙見神社事に造り舟と出せり千葉より出ると千葉舟と稱し寒川
より出ると結城舟と呼べ結城朝光の母は寒川尼と因り地名なり
延喜式位次ハ茂呂と地名なり内
内野小三山塚と云ありらなりとありと云ふ一酒井小三山勘解由と
云家あり此地より出し苗字なり
○知名類聚抄小千葉郡は郷名七を載す千葉ハ千葉町山家ハ御山村は

地小や池田ハ猪鼻山に登る坂を池田坂と稱はれハ千葉と寒川との間あり
一なるハ三枝ハ作草部村糟夜ハ
らん山梨ハ今印播郡山梨村物部ハ同郡物井村なり一べとハ小呼庵と井と
錯るハ中昔よりハ此と云ふらん
時平明神社 大和田村ハあり 祭日九月九日氏子村と稱する村四村
ハ所謂大和田萱田萱田町麦丸ハあり 此等此地時平公庄園と見えたり
幸谷本郷波佐間ハ時平公と菅公と合せ祭ると云西公ハ庄園なりと云ふ
ハ見ゆ 下野國誌卷四小安藤郡古江村ハ時平明神あり
神明社 萱田町ハあり 此地及萱田村ハ伊勢ハ御厨の地ハて 意富神社
神明と祭祀又萱田村ハ飯綱權現と稱する神なり 毎月廿四日ハ
神よりハ 本地不動明王 長鼻狐ハの 〇稻荷神社考に廿小飯綱權現と云ハ信濃飯綱山ハ茶吉尼なりと
密よりハ稻荷神と茶吉尼ハ天女形ハ限合せたりと云出たりなりと
云ふ

おとど
大和田
驛の圖

正伯新田ハ本名藥園臺村
ト云昔シ丹羽正伯ト云官医
藥園ヲ取立シ地ナリ其後日
光山へ移サレ今ハ名ニ存セリ

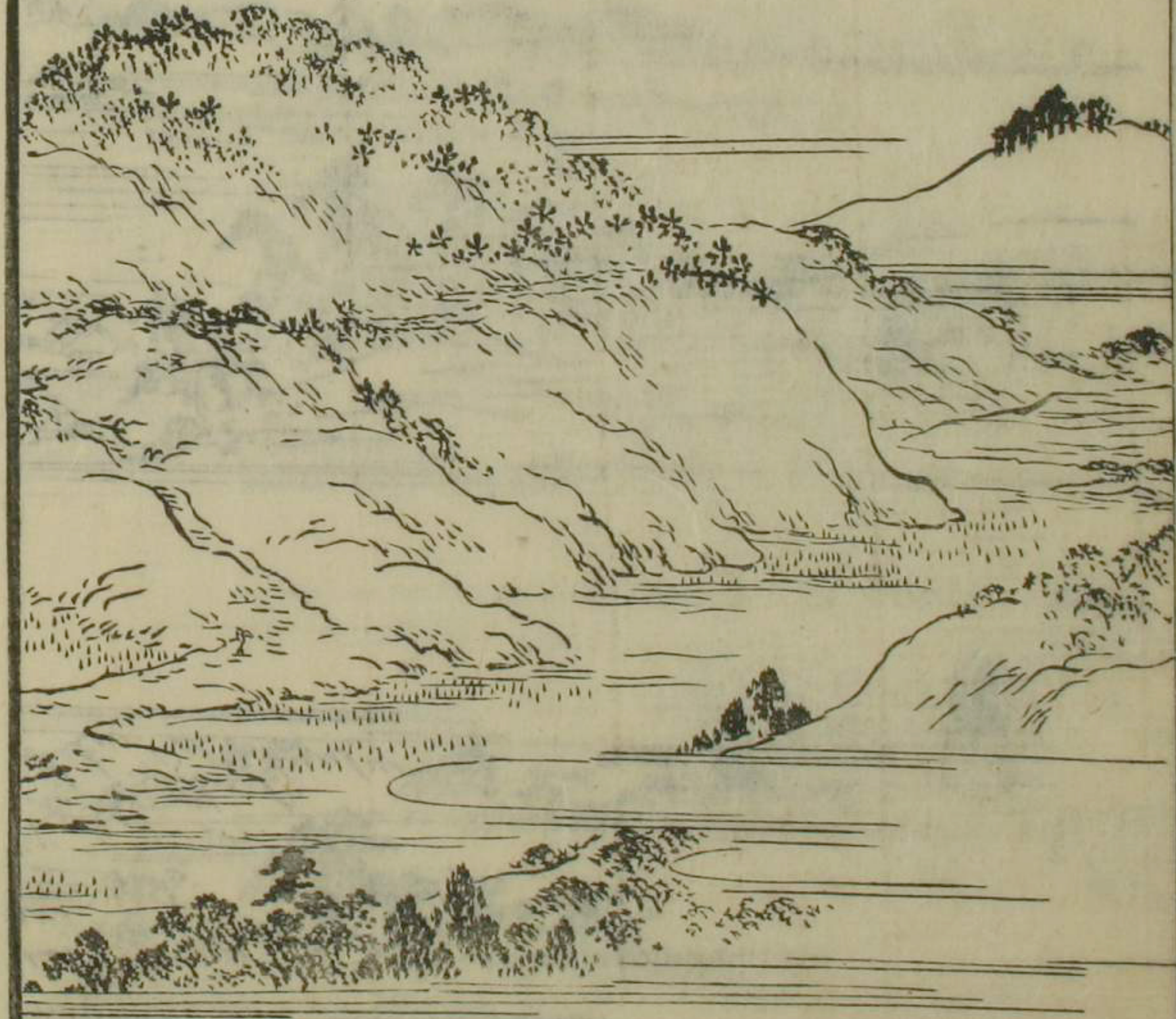


加賀清水ハ 大久保
加賀守佐倉ニ居城セシ
迷職ノヲリ常ニ愛シ汲
レシヨリ加賀殿清水ノ
名アリト云



印幡沼鑿開趾

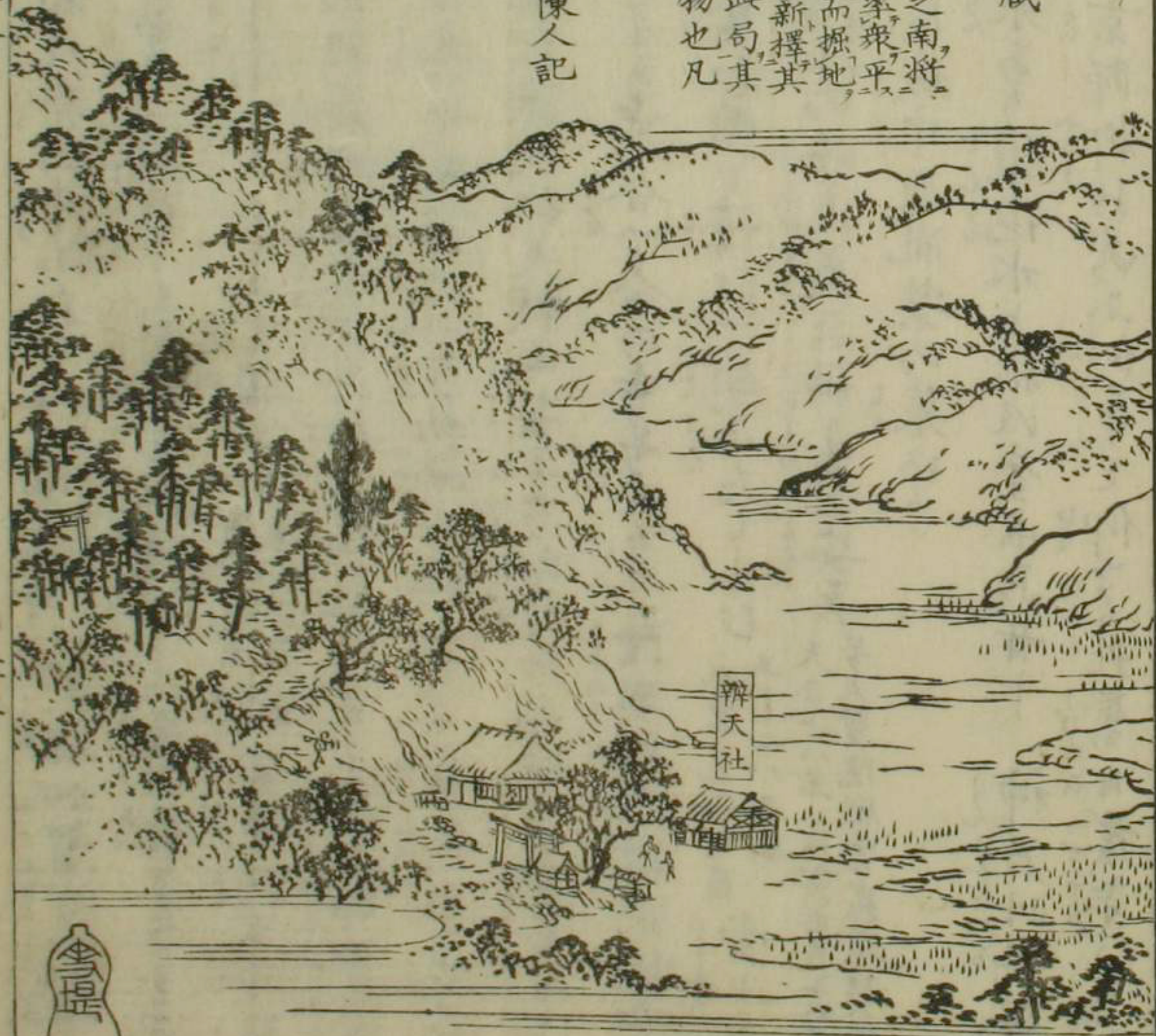
惣深新田ふあるところの基
磐を目撃しつゝ觀の如く見
え色少し黒し所謂槻の木
なり色小黒しあるハ埋
木の故なり



惣深新田香取某家所蔵
埋木基局識

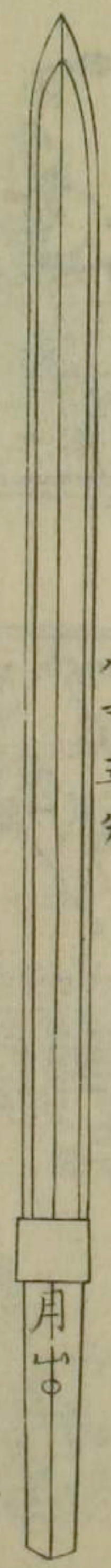
天明年間 官命鑿印波湖之南將
以達海約齋香取君之祖考率衆平
山丘貝殼出者許多至高臺而掘地
五丈巨木出亦多大率毀為新擇其
善良者一以為書架一則造此局其
湮晦幾許哉蓋數百年前之物也凡
材之終不朽滅如此歟

文化五年壬辰十一月
東都北溟陳人記



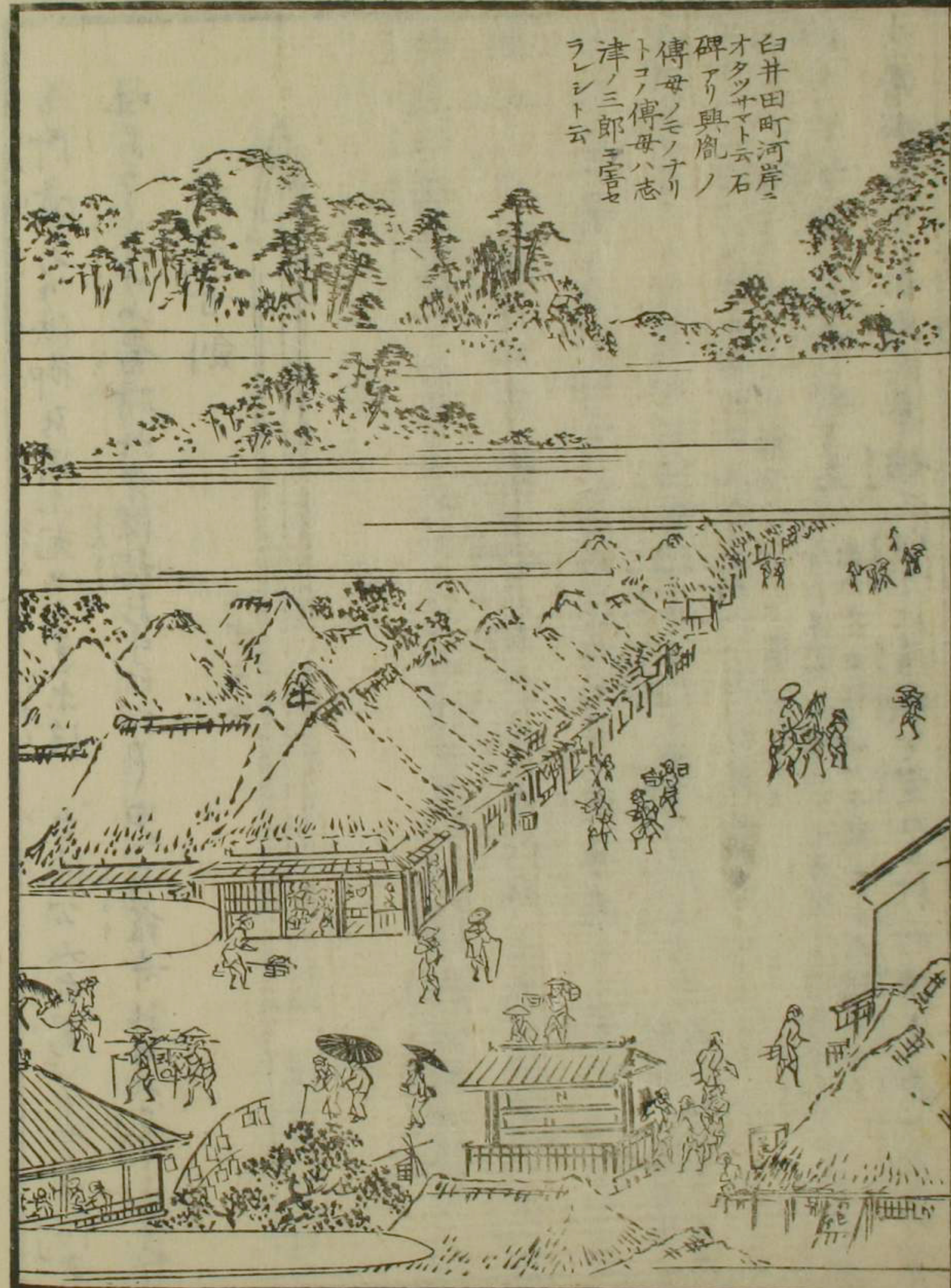
加賀殿清水 井野村に原の中ふあり 大和田と井野との間あり 大久保加賀守利常述
職のそり毎ふ此水と賞し飲せし 加賀殿清水と云名を負せたりと云
長谷山宗徳寺 臼井甚町ふあり寺領拾石 天正十九年五月 禪宗曹洞派陸奥
永徳寺末なり本尊八般若船觀音寺に傳へ應永に昔一原四郎胤高と
云ふもの建る所なり元八千葉郡北小弓柏崎の地ふあり報恩山と号せし
を天正三年胤高七世に孫式部大輔胤榮小弓臼井に西城を兼并せし
此地に長谷山龍雲寺と云寺合て今の寺号なり 陸奥膽澤郡永徳寺二世
巨海に法嗣聖山志賢和尚と傳ひて開山たり 弘享元年己酉五月廿八日薨 堂上小胤
榮 天正十年丙午四月六日卒法 号竜雲院殿私岳太宗大居士の子胤義に神主と安ん
又原氏に系系と蔵に域中原胤榮の墓あり 天正十八年丙寅六月十八日卒法 号大賢院殿東嶽道雄大禪室門
○里老云寺内ふ甘泉あり權現水と稱し長きに昔一 神君此地に狩せら
れしを 此ふ 八京師柳にふ似たりと仰せられ居る日蔭寺に清水と

と仰意あり供御に用ふ充せらるる後 台徳公又台駕とせられ此處
味ありとふ當時此寺深林に中たりゆ日蔭寺に名れり と云
所蔵古劍
八寸五分



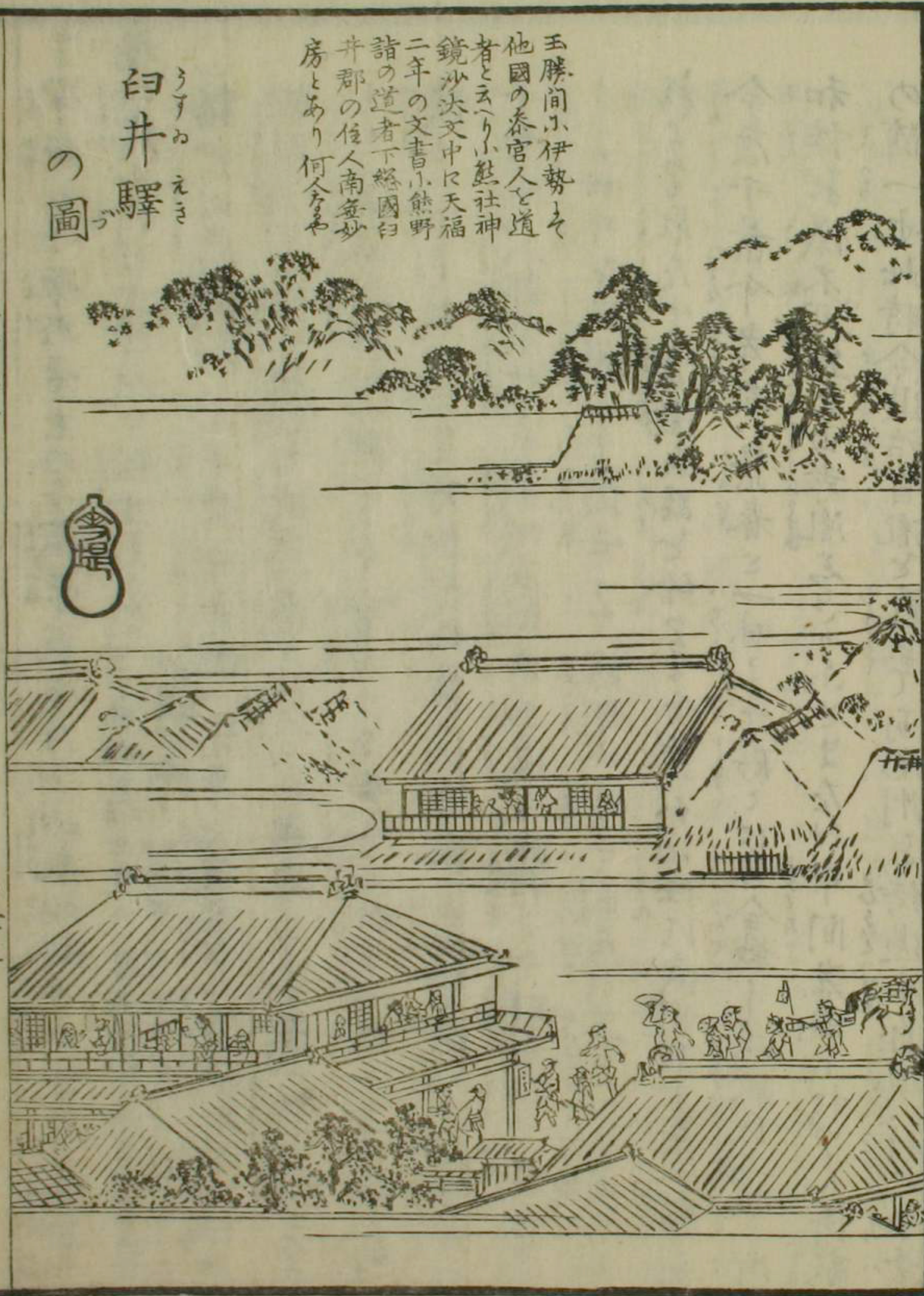
瑞湖山圓應寺 臼井田町ふあり寺領廿石 天正十九年 禪宗臨濟派ふて京
師妙心寺に屬し本尊八釋迦如來開山に佛真禪師と云寺に傳へ臼井興
胤幼日家難とせけ鎌倉の佛國禪師ふる後歸國する事を得て志津
氏の乱を平らけ佛國に法嗣佛真と清て津寺の開山とせり 牌子に田應寺殿江
三甲申四月十八日卒中興祖平身胤と見ゆ 第二世道安和尚
胤胤に二男なり此ふを本領に十か一と寄せし 今此甚所を往來と大名宿と云田を寺と云 臼井若康
臼井古城址 臼井村ふあり 南の方へ出たる地と中城と云又外城あり 臼井若康
此居所なり長元元年始て臼井に居城と定りし此所謂常兼六堂の一なり

白井田町河岸
 オクサマト云石
 碑アリ興胤ノ
 傳母ノモノナリ
 トコノ傳母ハ志
 津ノ三郎ミヤモ
 ラレシト云



玉勝間小伊勢
 他國の泰官人之道
 者ト云ヘリ小然社神
 鏡沙汰文中に天福
 二年の文書小然野
 詣の道者下總國白
 井郡の住人南釜妙
 房トあり何人ナリ

白井驛
 の圖

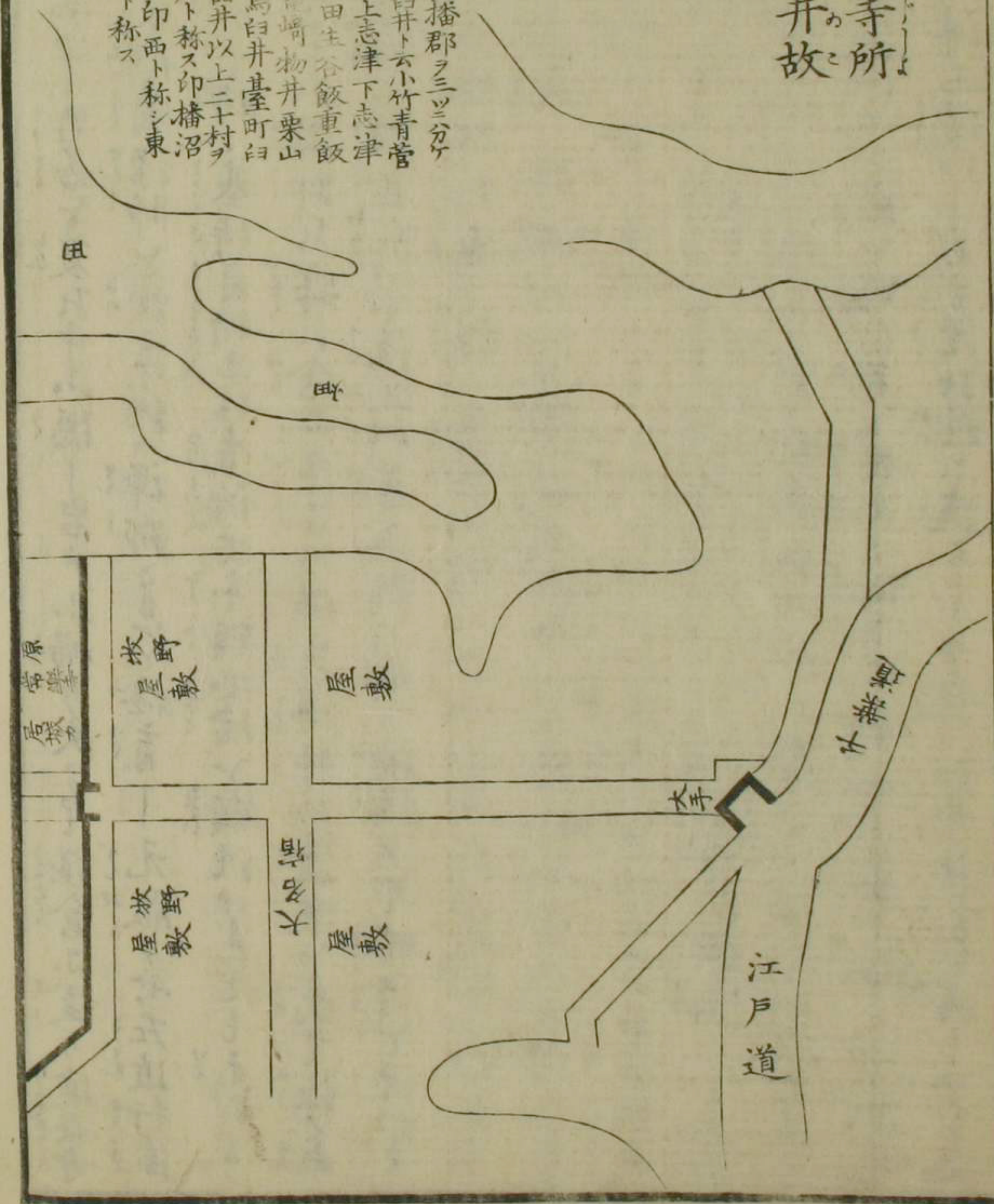


子常康子常忠常忠の子盛常盛常子祐胤相嗣て此小居り葛飾印
播二郡の内百十餘村と領せしとて 百十餘村と領せしとて八原氏の代のことを云ふ
○鎌倉大草紙卷下 小千葉介孝胤ハ先年父陸奥守入道常輝と相傳ひ
故胤直兄弟に腹切せ成氏一奉ふ人々成氏より千葉一跡と給ふ
々々其後胤直ハ一跡とて實胤と千葉介小任一上杉より下總一指
遣といへとも成氏より孝胤と胤負より千葉より居たり終り間實胤ハ
千葉城入部不叶く武州石濱葛西邊と知行く時氏待て居たり
一の世中と述懐く道玄く澤州より閑居其兄ハ自胤と上
杉より取たり實胤ハ跡と給ふ千葉介に任り武州ハ千葉と號
今度千葉介孝胤ハ景春と一味く所く合戦く又成氏上杉と御
和談ハ儀不可然之由孝胤より小さまなけ申間孝胤小杉く御敵
の随一也此時令退治自胤と取亭西總州ハ侍過半自胤ハ付て千葉

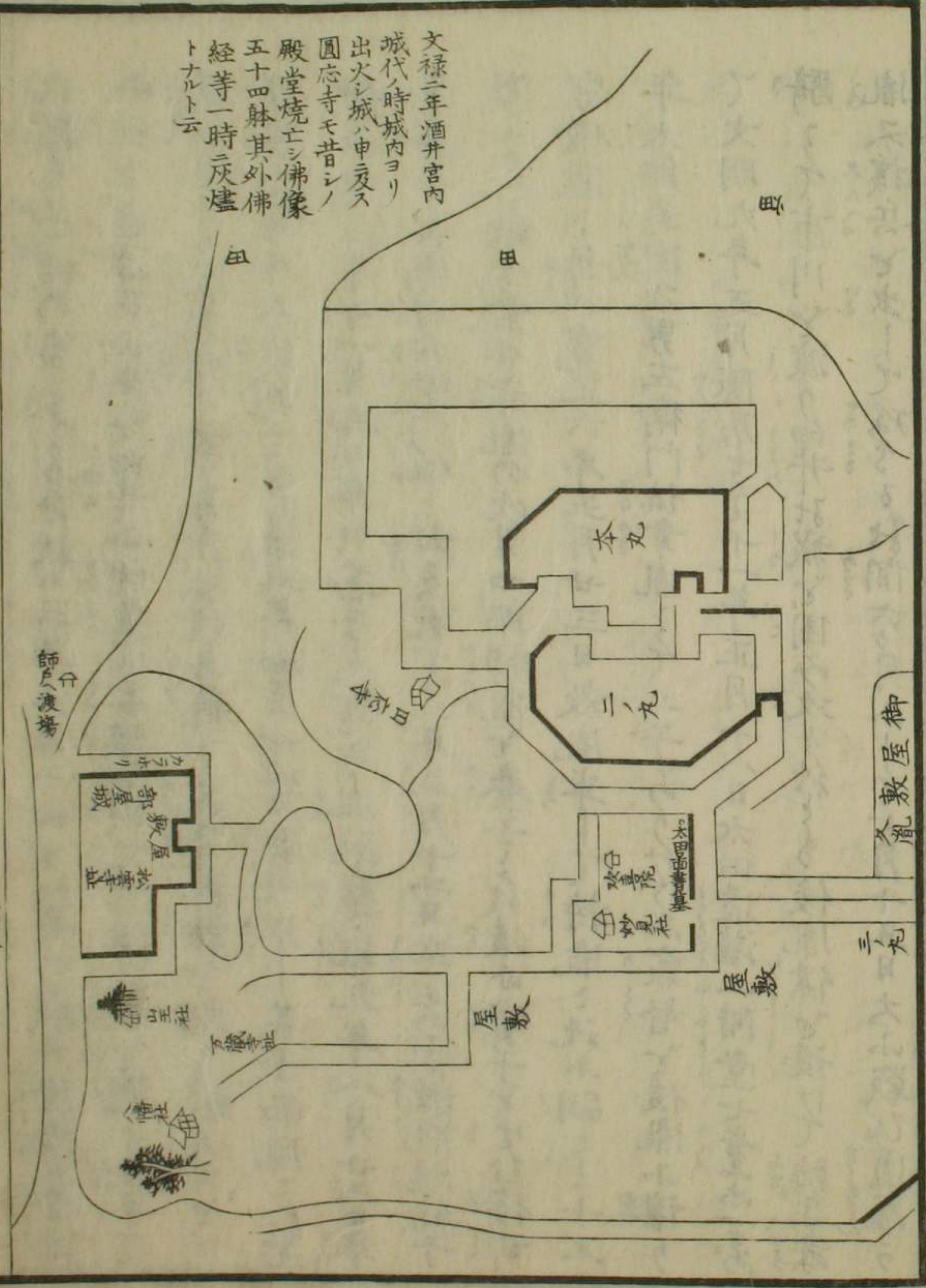
一跡可令相續く為小西上杉より加勢ありて成氏一此より肉意をえて太
田道灌下總國國府基小陣取より陣城とくくける同十二月十日孝胤ハ
原二郎木内と先く下總國境根原ハ出張道灌馳向合戦とく免
終日戦ひくし孝胤ハ打負て木内原以下悉討死す殘黨ハ白井の城小楠
籠明文明十一年正月十八日白井の城ハ押寄道灌ハ歸陣く太田國
書助と千葉自胤兩大將より攻戦ふくども寄手ハ小勢より叶ハは管
領御馬よりせられ可然く望とく是を延引敵ハ要害能く
力落小難落とくくも勢とけ上總國長南の城主武田三河入
道とて免れ終ハ七月五日降参く自胤小歸服と丸ヶ谷上總介も
同自胤ハ降参下總國飯沼も落城く海上備中守師胤も同自胤ハ
降参自胤千葉ハ入部ハなれとも西總州大形自胤ハ歸服とけるあ
いた先長陣なれ歸陣有べくく七月十五日陣拂ハ休を見て城よ

圓應寺所
藏白井故
城圖

白井庄印播郡ヲ三ツカケ
印東印西白井ト云小竹青菅
井野上座上志津下志津
畔田内黒田生谷飯重飯
郷野田屋崎物井栗山
長岡洞島白井臺町白
井田町白井以上二十村ヲ
白井ノ庄ト稱ス印播沼
ヨリ西ヲ印西ト稱シ東
ヲ印東ト稱ス



文祿二年酒井宮内
城代時城内ヨリ
出火シ城ハ申度ス
圓應寺モ昔シノ
殿堂焼亡シ佛像
五十四軀其外佛
經等一時ニ灰燼
トナルト云



氏猶も無禮の事多うけられ三年八月十四日臼井の城の隍浚普請
不託志津に士率と臼井不呼集め其隙と伺て志津に城と圍に攻ること
甚急なる亂氏防く事あたらしく自殺す其妻屍骸と抱き城に火を
け其身も共不焚死す貞治三年四月十四日興胤率一其子尚胤これと
繼永徳二年十一月三日卒に其子太郎冬胤繼應永九年八月廿三日卒
其子長胤繼右衛門佐と稱す永享二年五月十二日卒長子教胤繼初子
なりし故子兼介孝胤の次男四郎持胤と養子と以後小實子と生む備前
守俊胤と稱し寛正六年五月廿三日教胤率一て持胤に此不嗣こと十三
年太郎為胤次男左衛門佐幸胤とて二子ありけり家督と俊胤に譲り
て文明九年五月隱居せり十一年正月十八日太田道灌二階堂七堂ホ一
騎して市川と渡り臼井に城と圍み攻め終り俊胤謀と設けて防ぎ孝
胤又援兵と出して攻めり其間六月より七月十五日大戦ひ道灌の

兵敗北し舎弟圖書と城中に討取る圖書を墓臼井十八年二月俊胤家
督成幸胤ふゆつて退き入道して玄光と号し是年持胤率一延徳二
年六月十九日幸胤十九歳とて死し子なき故孝胤の計らひて俊胤
入道再び城主となる永正十一年正月長子太郎景胤ふゆつて隱居
して同十四年五月十七日卒に景胤八弘治三年十月十五日卒一
其子久胤家督たる左近と稱して年僅ふ十四歳なりけり景胤
病中ふに社と患ひ近き縁者ありけり社に原上總介胤貞と招て後見
と頼む胤貞心ふ一物ありて一月の中十日つ臼井に居て郡政を大
小となく興行ひ福を施し諸士と懐け貢税と軽くして百姓と接し私
恩を施しける故領内此士民自然と胤貞に懐き從て久胤八有る無る
如くなりゆき城門の傍に宅と營て此に居る今其地を津屋敷と云
其旧跡 本城ふに胤貞隱居するに依て久胤八結城ふ走りて結城晴朝と憑

欽さけけい晴朝百貫地と所たへ十二人圓連判の衆小列に
印井黒田小堀繁谷鹿窪のち後小水谷出羽入道小属ひらののふも者陸國下館小居以胤貞
神が磯片貝是なりいづくいせい愈威勢と震ひ織田信長卿駿馬と献うすめて印井小弓の両城と稱なづけ礼
祿四年正月里見義亮家臣正木大膳として印井小弓の両城と攻て是を
取とり同五年貞胤謀と巡らとり小弓城と取復に同七年四月十一日印井の城
と取返す同九年丙寅この前將軍義輝上杉謙信印井城と攻る時甲陽軍
ハ永祿二年已未結城晴朝先陣と請ひ胤貞と撃て久胤と復さうや功者ありて
機變小居あう故胤信ゆき此を惡にくむ多理攻小責さめりて諸平空堀小居
入々いづに土居崩れて悉くたれた小居敗れて引取るひきこる
□武部千葉重胤は後見して小田原の城小籠りし小北條滅亡小及おほいり
バ天正十九年五月十八日東照神君酒井忠次を遣つり印井城と取
めり小結城ゆづへ走り久胤ひさハ天正二年七月五日下午館ひさりて卒そ時宗の道

場蔵福寺に葬る三子あり長と將監忠胤と云次と平十郎季と右近村
胤と云皆水谷家せいのやに生長す忠胤病て仕と罷て死つ後ち平十郎ハ
下館と去て攝津國大坂小流落りて終る所と知れ村胤ハ始終水谷家に
仕て明暦元年十月廿八日備中國松山に卒そ一壽覺院と云寺小葬はうむと
云以上概録は細江ハ志津三郎某用華三郎某師戸四郎某
松山貞辰辰なり
○玄仙本印井系圖
田應寺田應寺牌子三葉介常兼三男印井六郎常康二十五代末裔太郎景胤法
名天岳常舜景胤子久胤こ子村胤村胤寛文十一年辛亥十月廿八日村胤子
平益胤立之トアリ玄仙本へ年月ヲ
記セシハ牌子ニヨリシナリ

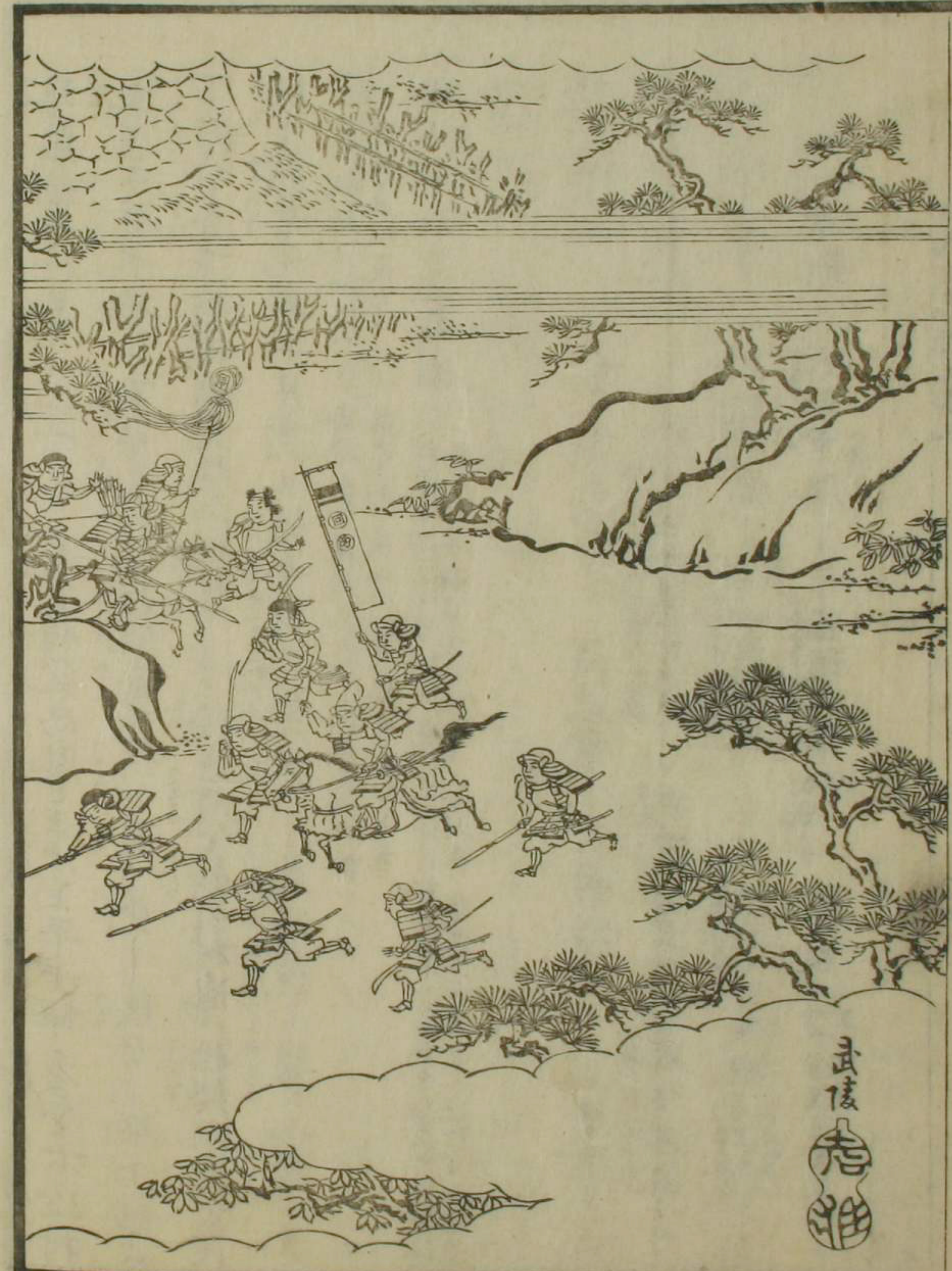
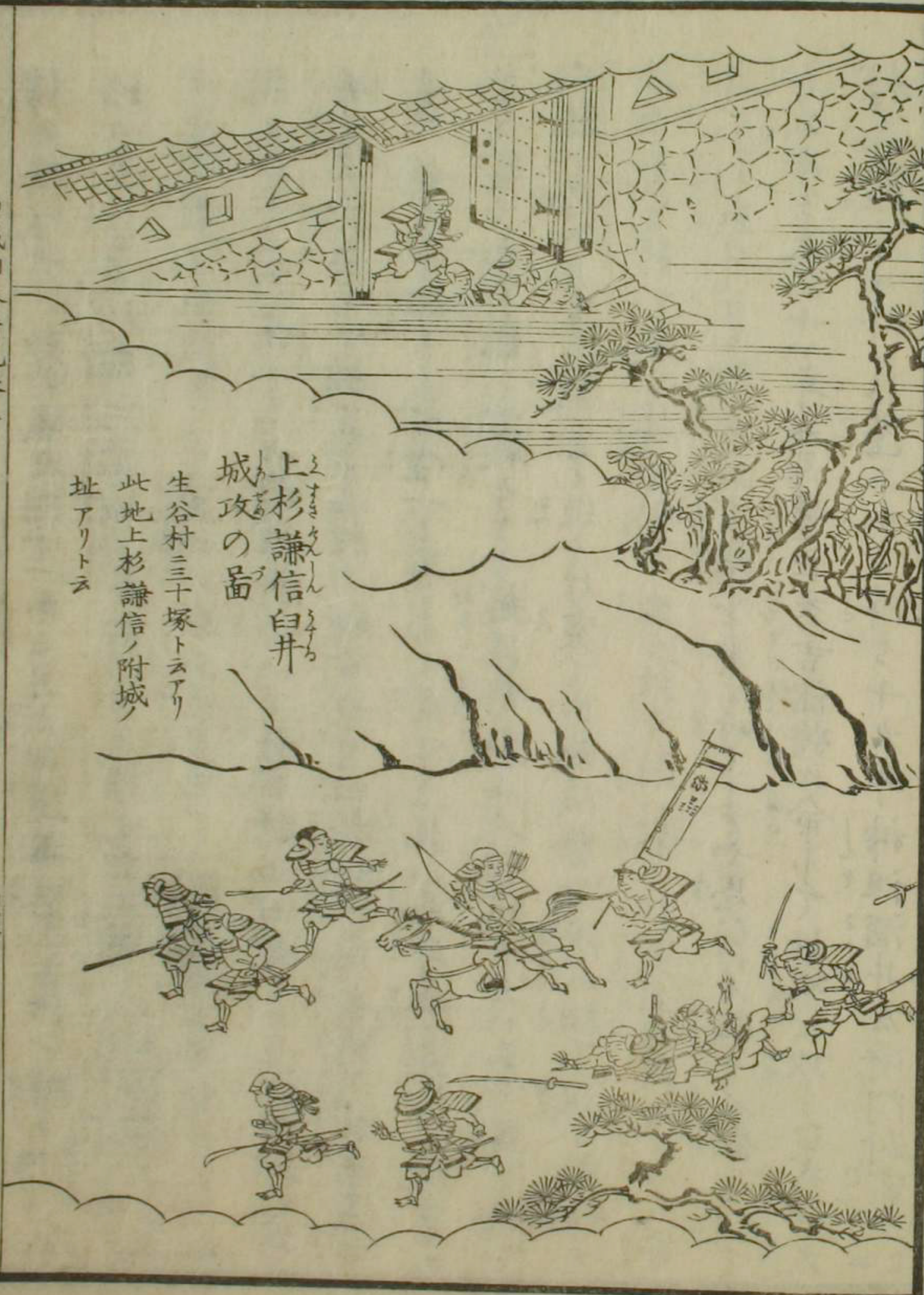
印井常安 田井二郎成常 六郎盛常 常清 太西胤常

左近將監典胤 某瑞湖山田應寺開山△道庵左近將監包中 太郎冬胤

石く佐之胤 左近將監 四郎持胤 備前守俊胤 入道後直

左衛門幸胤 太郎幸胤 左近久胤 結城三テ 以下畧 △此系常康ヨリ與胤ニ
△景主

上杉謙信白井
城攻の畠
生谷村三十塚ト云アリ
此地杉謙信ノ附城
址アリト云



武後寺

諸國廢城考

臼井城文明十一年七月太田道灌攻ておれと陷る城主永

祿七年三月上杉輝虎當城小祭向に城主原式部大輔ハ九代後記作上徳介

千葉介國胤に近臣より累世此城小在る輝虎近日祭向るの由

聞えけき千葉介より推津推名以下數百騎小田原よりも松田孫太郎

并与力引具して楯龍る去程小輝虎衆可田柿崎内藤長野太田美濃守

其子梶原と始として唯一もみもみ落せ一旦小取寄攻られける城中

アも突て出て散る小戦々々越後勢數十人討終々ハあけ具と吹て

人數と繰入る廢小城より追うけ突て出越後勢と追立切て廻る式部大

輔も是と見て城と拂て突て出々終々敵ハ散るに突立られはるる本

陣へ引返る輝虎此有様と見て叶くと思ひけん頼て人數と引て

お入る天正十八年五月豊臣秀吉諸將に命して此城と攻む式部大

輔支拒る叶は遂不出て降る十九年神祖酒井左衛門尉家次

衛門尉家次日記宮内太輔今迄行實録

と本國小封に此城小居る三峯石と食む慶長九年家次

と上野高崎小改め封に

△古戦録永祿七年三月又四年四月小作り原式部大輔

五百餘兵と添て二の郡と守る大和田此塔ハ南方松田孫太郎康郷

太田圖書墓 臼井村歡喜院と云寺の辰巳方にあり

ハ幡社 天神社 共小同所小ある里老云臼井興胤且利尊氏小從て菊池と

筑紫國多々羅濱小戦ひより筑紫兩社小祈るあり此ハ二社とこの地小景祭

一椎と樟と宇佐より持来りハ幡社に植ると云山王社小も老楠あり

村名も其時おものぐ印西より多々羅村ある興胤多々羅濱の事に因る

八幡社前石燈籠識

奉寄進願主 臼井村願主 平宗憲男 川口宗建

八幡官御寶前石燈籠

寛文十二壬子年十一月十五日

外一基ハ平宗建室藤原氏女ト識セリ
川口家ハ元此地ノ地頭ナリト云今深川大
軒堀川口熊五郎高千七百石此家當時
八幡社領若干寄附セリト○陣屋址
臺町ニアリ墓ハ寶藏寺ニアリ

白井山王社老楠の圖 周圍五丈餘
 相傳延元元年白井興胤筑紫ヨリ
 持來り植ル所ト云



本覺山淨行寺所藏机識

日蓮上人像御腹コモリ法華經八卷アリ

日蓮上人像御腹コモリ法華經八卷アリ
此机由井山光勝寺ト云時宗ノ寺アリ此寺ニ關王像アリ首中ニ識アリ云
此机首小野篁作也光勝寺ミミト見ユイカナルユエニヤ 或記ニ常祐代
遊行ニ代真教上人下總ノ國有シ時歸依テ光勝寺ヲ建立ス云
佛舍利一粒アリ日付大所傳ト云
其大サ推子ノ如シ

下總國臼井淨行寺住物時代日胤

奉奇進佛經拾部并机拾桶二杵成就祈者也

大願主原越前守御内施主教白

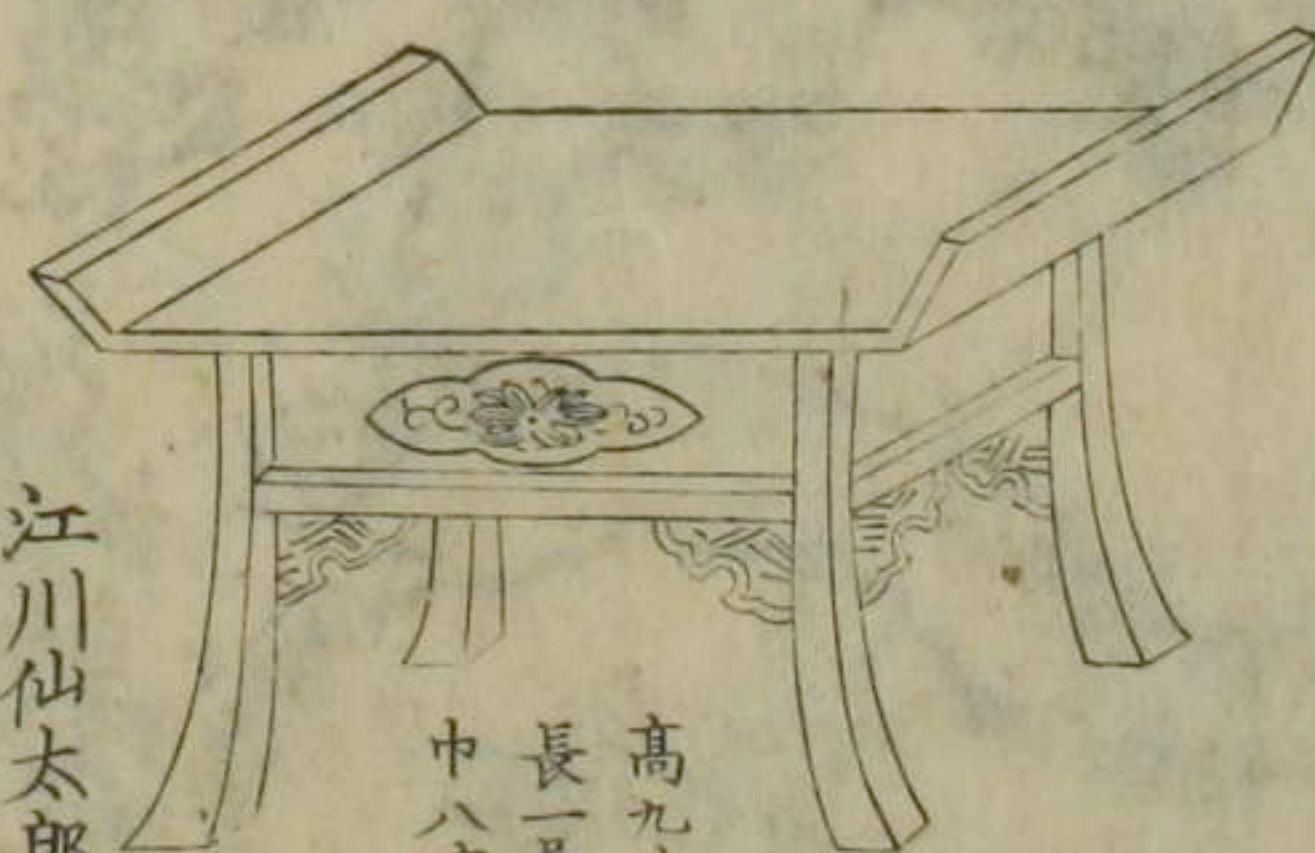
六月拾貳日

日蓮上人像臺裏書

天正十年八月二十二日

原越前守御之

成田參詣記卷三 終



高九寸五分
長一尺六寸
中八寸八分

江川仙太郎刻

